

目 次

日本の山岳信仰と温泉	鈴木 健郎	1
1 「治癒文化」の広がり——山岳信仰・温泉・寺院・神社		1
2 中国と日本の山岳信仰——道教・仏教・修験		3
3 温泉信仰——温泉行幸・地獄・地藏・薬師信仰・湯治文化		10
結び		12
草津の温泉文化——湯治・ハンセン病・被差別部落	川上 隆志	16
1 現代社会に蔓延する差別と排除		16
2 草津における湯治の歴史		17
3 草津温泉とハンセン病		21
4 草津温泉と被差別部落		29
5 草津良いとこ一度はおいで		33
日本の《発見》——西欧人／日本人による《旅行》と明治・大正期のガイドブック ～ポール・クローデルの目に映った1898年と1920年代の間の日本を例として		
	根岸 徹郎	36
1. はじめに		36
2. クローデルと日本		37
3. 外国人による外国人のためのガイドブック——E.サトウとB.H.チェンバレンの『日本旅行案内』から『ケリーの日本帝国案内』へ ～外国人が見たいものの紹介		41
4. 日本人による外国人のためのガイドブック——『東亜英文旅行案内』 ～外国人に見せたいものは何か		47
5. 外国人による日本人のための提言——治癒から治療、 そして保養場としての温泉地へ～温泉の利用法の変化		51
6. 日本人の書いた日本人のための案内書——交通手段の進展と観光地の成立 ～新しいスタイルの定着		56
7. ふたたび、クローデルと日本～1898年から1921年へ——むすびに代えて		62
編集後記		72

日本の山岳信仰と温泉

鈴木 健郎

1 「治癒文化」の広がり——山岳信仰・温泉・寺院・神社

日本社会の歴史において、「治癒」に関わる文化と土地は、宗教・巡礼・伝説・文学や経済・交易・観光と結びついて重要な役割を果たしてきた。「治癒」の拠点として重要な役割を果たしてきた温泉・湯治場も、火山や鉱脈や地下水などの自然環境、宗教・治療・民俗・地域社会・経済・伝承や文学と結びついてきた。国土の大半が山であり、世界有数の火山地帯として多数の温泉を有する日本では、山岳信仰に関連する多くの寺院や神社が、温泉との地理的・文化的関連性を有し、宗教文化と温泉文化が聖俗一体となって、社会・地域の活性化・再生と関係する。

日本の山岳信仰においては、山体や大岩（磐座）や洞窟や火口などの崇拝とともに、瀧・淵・湧水・泉など水に関わる聖地・霊場が多く見られる。聖地・霊場・霊泉としての温泉は、「火」と「水」の信仰の要素を同時に有し、さらに山岳や岩石の崇拝とも結合しうるものである（顕著な例として湯殿山がある）。また、温泉の湧出する場所は、硫化水素などの火山性ガスを噴き出す場合には（実際に動植物が死んだりすることやその荒涼たる景観から）死の世界への入口あるいは「地獄」のイメージと結合することが多いと同時に、心身の疲労や負傷や疾病に対する温泉の治療効果からは「再生」「治癒」「救済」がもたらされる神仏の加護を実感する聖地として伝説化され、地藏信仰・観音信仰・薬師信仰などと結合する。

近代的な医療システムや公衆衛生が整う以前の日本社会では、現代の観光産業化した高級・贅沢な「温泉」のイメージとは規模も意味も大きく異なり、一部の貴族や富者だけではなく、庶民、負傷者や病者など、あらゆる階層の人々が治療・治癒のために頻繁に湯治場に通い、これに宗教的救済や地域経済が結びついた、「治癒文化」の領域が存在していた（特に江戸時代以降には庶民層までを含めた「旅」「巡礼」「湯治」が一般化し、飛躍的に大規模化する）にもかかわらず、その空間的な広がりや通時的な変化の様相についてはよくわかっていないことも多い。地質・化学・医学など科学的な温泉学や観光的な研究などに加えて、宗教史や地域社会史の中で「治癒文化」が果たしてきた重要な役割の認識と研究の意味は大きい。

専修大学社会科学研究所の助成による共同研究「社会における「治癒」文化の総合的研究—聖地・交易・復興拠点としての寺院・温泉・共同体」（2015–2017、研究代表；鈴木健郎）では、青森、秋田、岩手、山形、長野、栃木、群馬、和歌山、三重、石川、新潟、福岡、大分などで、

「治癒文化」の様相を実地調査した。限られた調査とはいえ、各地域において、湯治場・神社・寺院・観音信仰・薬師信仰・地蔵信仰・山岳信仰・民俗・文学・地域社会・経済などが、密接関連してきたことを確認することができた。

- ①長野県の秋山郷（平家落人伝説あり、江戸時代に鈴木牧之『北越雪譜』『秋山紀行』の紹介で著名な豪雪地帯）、霊泉寺（平維茂伝説、龍伝説、温泉神社）、別所温泉（円仁開創とされる大師湯や北向観音が複合的に治癒文化を形成している）
- ②岩手県の繫温泉（前九年の役に関連する開湯伝承あり）、秋田県後生掛温泉（八幡平。恐山巡礼と関連する伝承あり）、尾去沢鉱山（行基伝説、怪鳥伝説、隠れキリシタン史跡あり）、青森県の嶽温泉（岩木山麓、狐の導きによる開湯伝説）・アラハバキ神社（鉄生産や交易と関連）・岩木山（岩木山神社の至近にも百沢温泉、境内にも温泉あり）
- ③三重県鈴鹿山脈の湯の山温泉周辺（伊賀・甲賀ルート、御嶽信仰、修験道）および和歌山県吉野（金峯山）・十津川温泉・熊野（修験道奥駆ルート、熊野神社・速玉神社）や沿岸部の補陀落渡海関連寺院（補陀落山寺）
- ④栃木県那須岳山中の大丸温泉・北温泉・那須温泉湯本の「鹿の湯」と温泉（ゆぜん）神社（白鹿と狩人による発見伝説）・賽の河原と殺生石（火山ガスの噴気、九尾狐の伝承）、古峯神社（古峯ヶ原。日光修験、火伏信仰・天狗信仰）
- ⑤石川県の白山比咩神社（白山信仰）、山中温泉（行基による開湯伝説、薬師信仰、芭蕉が永平寺に向かう途上に滞在）、福井県の永平寺

などを調査した。（2014年には、共同研究の予備調査として、現在も治病の湯治場として活動中の群馬県の「釈迦の霊泉」、および古来の草津温泉（行基伝説・薬師信仰・頼朝伝承・湯治文化・ハンセン病関係施設など）などを調査した。

修験道・山岳宗教の民俗・歴史、陸・川・海交通・交易ルートと宗教・信仰の圏域の関連、鉱山文化、火山崇拜などが、日本における温泉・寺院・共同体の治癒文化と密接な関連を有する。全国的な修験道や仏教の布教・巡礼ルート、陸や海の交易ルート、渡来文化、中国・朝鮮半島との交流も視野に入れながら、共同研究の終了した2018年度にも、個人研究として、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）や九州の英彦山など山岳修験の重要拠点を中心に、実地調査と資料収集をおこなった。

温泉（治癒）と宗教（救済・信仰）の結びつきについては、特に温泉神社・温泉寺や地蔵・観音・薬師の信仰、温泉経営と寺社の関係、開湯伝説の伝播と勸進聖・遊行僧・修験者の関係などの視点からの研究がある。¹また、日本の山岳信仰や修験道に関しては、全般的な歴史・修行・儀礼・教義・組織・社会活動などの研究から個別具体的な各地の山岳信仰・修験者の活動の様相と地域間の相互交流およびその歴史的变化などについての詳細な研究の大量の蓄積があ

る。² これらの先行研究の蓄積を踏まえつつ、本論では、中国の道教の山岳信仰などの影響についても、簡単に整理しておくことにしたい。日本の山岳信仰や修験道は、中国の仏教や道教の多大な影響を受けていると考えられるが、この点に関する研究は非常に少なく、基礎的な事実がよくわかっていない部分がある。筆者の専門分野は、宗教学の観点からの中国道教の研究であり、これまでに科研による調査などで中国道教の山岳聖地（山中の洞窟が仙界と通じるとされ、また優れた気の流れている修行に適した場所として、「洞天」・「福地」と呼ばれる）の多数を調査した経験がある。³ 中国の山岳聖地でも、日本と同様に、水や泉への信仰は普遍的に見られる。一方で、中国にも火山は存在するものの、⁴ 世界有数の火山地帯の日本と比べるとその数は少なく、温泉も存在するが、⁵ 地質的条件や自然環境、地理的景観や開発利用の歴史や状況はかなり異なっており、日本のような山岳信仰と温泉・湯治場の密接な結びつきが頻繁かつ顕著に見られるということはない。

中国の山岳信仰や道教も、日本の山岳信仰や修験道も、温泉・湯治場や神社・寺院や地藏・観音・薬師信仰などの複合からなる温泉聖地も、人間によって歴史的に形成されてきたものであり、太古から不変に存在してきたものではない。資料の制約から解明しきれない古来の要素を有していることを考慮しつつ、文献記録や考古学的資料によって、地域や時代による差異や変化、歴史的形成過程を考察する必要がある。無論、温泉・山岳信仰の調査研究も、中国の山岳宗教・道教の調査研究も、対象となる範囲や事例が膨大であり、継続中・継続予定の研究課題であるため、これらを総合的に考察して明確な結論を出すには更なる研究が必要であるが、本論では、現段階での共同研究の報告として、日本の山岳信仰と治癒文化の形成史に関する基本的な問題の整理を試みたい。

2 中国と日本の山岳信仰——道教・仏教・修験

山岳崇拜・山岳信仰というものを、その起源まで遡って考えるならば、農業社会以前の狩猟採集社会や治水が整わず平地が頻繁に洪水に見舞われていた社会にあっては、そもそも山や丘陵のほうが居住や生活に適していた時期の存在や、太古から存在した火山噴火に対する畏れとそれを司る神霊への崇拜などを想定することが可能である。そうした意味では、日本の山岳信仰も中国の山岳信仰も、ともにはるか昔に遡る要素を含んでいることは確かであるが、残念ながらその詳細はよくわかっていない。

日本で、仏教系の山岳修行者が活動し、ある程度の教義・儀礼・修行の体系を備えた「山岳宗教」の個人的・集団的な活動が現れてきたことが考古資料や文献記録によって確かめられるのは、6～7世紀ごろとされるが、⁶ 中国ではこれよりはるか以前の時代に、五岳祭祀や仏教の

山岳寺院、道教の洞天福地信仰など、大規模かつ体系的な山岳崇拜・祭祀が成立している。宗教の領域に限らず、日本の広範な文化や制度、社会や「国」の形成と成立が、古くから中国や朝鮮半島との交流と密接に関連していることは広く知られているが、中国の山岳信仰の歴史とその日本への影響についてはよくわかっていない点が多い。日本と中国の交通、温泉信仰関連の要素と合わせて、まずは基本的な概略を年表形式で整理しておく以下のようなものである。

【山岳信仰・温泉関連年表】

- BC247 秦王政（後の始皇帝）が即位、驪山（現在の西安近郊）に陵墓の造営を開始。
- BC221 始皇帝の中国統一
- BC219 始皇帝が泰山で封禪を挙行。徐福らを東海に派遣。（和歌山・東北など日本各地に徐福渡来伝説）
- BC110 漢の武帝が封禪を挙行。（山東省泰山）
- 317 葛洪『抱朴子』（仙人・鍊丹・山岳聖地など豊富な内容→日本へも伝来）
- 364 楊羲が茅山で神仙の降臨を受ける（→上清經典群の形成、神託は後に『真誥』として編纂）。
- 437 陸修静(406—477)が道教經典を整理して目録を作る（『靈寶經目序』）。
- 442 道士の寇謙之が北魏の太武帝に法籙（道教の位階の証明）を授ける。
- 446 北魏の太武帝が道教を信奉し、仏教を弾圧。
- 318 道士の陶弘景が茅山（江蘇省鎮江）に入る（『真誥』を編纂）。
- 508頃 北魏で道教石像が盛んに作られるようになる。
- 574 北周の武帝が道教を信奉し、仏教を弾圧。
- 413～502 倭の五王（讚・珍・齊・興・武）の南朝への入貢**
- 6世紀（538?） 佛教の公伝**
- 600 第一回遣隋使（『隋書』）**
- 602 推古朝に百済の觀勒が曆本・天文地理書・遁甲などの方術書を将来。
- 607 第二回遣隋使（『隋書』『日本書紀』）**
- 630 第一回遣唐使**
- ・太宗（在位 626—634） 646『晋祠銘』、648『温泉銘』（※驪山温泉）
 - ・舒明天皇（在位 629—641） 631・638 に有馬温泉に行幸（『日本書紀』）
 - ・孝徳天皇（在位 645—654） 647 に有馬温泉に行幸（『日本書紀』）
- 660 百済滅亡**
- 663 白村江の戦い**
- 319 唐の高宗が各州に官設の寺と道觀（道教寺院）を建設。
- 668 高句麗滅亡**
- 672頃 天武天皇が陰陽寮（令制官司の1つで天文の觀測・曆の作成などを担う）を設**

- 置。
- 675 新羅による朝鮮半島統一
- 698 渤海建国 (→遣渤海使)
えんのおづね えんのぎょうじや
- 699 役小角 (役行者) が妖言をなしたかどで伊豆に流される。
- 717 行基の活動が僧尼令に違反するとして糾弾される。
げんそう しほしやうてい
- 721 唐の玄宗が道士の司馬承禎(647—735)から法籙を受ける。
- ※ 司馬承禎『天地宮府図』;「洞天福地」の体系 (十大洞天・三十六小洞天・七十二福地)。
- 733 『出雲国風土記』成立 ※出雲玉造温泉の記述
- 735 日本の遣唐使が『老子道德経』と天尊像を玄宗に請い受ける。
- 738 唐使が新羅に『老子道德経』をもたらす。
- 743 玄元皇帝(老子)の降臨を承けて、崇玄館 (道教の大学) や道観を整備。
- ・玄宗 (在位 712—756) (道教崇拝、「楊貴妃・華清池」→白居易「長恨歌」)
 - ・聖武天皇 (在位 724—749) 741 国分寺建立詔、745 東大寺大仏開眼
- 743 行基が東大寺の勸進となる。
- 749 行基 (668—) 没。 →【各地に行基開湯伝説】
- 753 遣唐使の藤原清河が、鑑真とともに道士を日本へ携行せよとの玄宗の求めに対し春桃原らに道教を学ばせるとして拒絶。
ふじはらのきよかわ かんじん
しゆんとうげん
- 797 空海『聳誓指帰』(→三教指帰) 成立。吉野の金峰山や四国の石鎚山や室戸岬などで修行。
- 804 空海が入唐。806 帰国。
- 806 白居易「長恨歌」
- 816 円仁が最澄に従って東国 (下野など) を巡る。
- 822 最澄 (767—) 没
- 835 空海(774—)没。 →【各地に弘法大師開湯伝説】
- 838 円仁が入唐。(『入唐求法巡礼行記』838~847) ※遣唐使の最終回
- 840 円仁が五台山を巡礼。さらに長安へ赴く。
- 320 唐の武宗が道教以外の諸宗教を禁止(会昌の廃仏)。
- 847 円仁が帰国。(その後、関東・東北に多数の寺院を開基したとされる)
- 864 円仁 (794—) 没。 →【各地に円仁開湯伝説】
- 891 円珍 (814—) 没。
- 889—897 (宇多天皇寛文年間)『日本国見在書目録』藤原佐世 (?—892)
- 918 相応 (831—) 没。法華経・断穀・回峰行 →※「千日回峰」
- 985 源信 (942—1017)『往生要集』成立。 ※極楽・地獄のイメージの流布。念仏による往生 (浄土) を説く
あへのせいめい
- 989 安倍晴明(921—1005)により、泰山府君祭 (延命や解厄などを祈願する陰陽道祭)。
あべのせいめい たいざんふくんさい
- 1008 北宋の真宗に「大中祥符」が天降り、道教尊崇が進行。真宗は泰山で封禅。
しんそう だいちゆうしやうふ

- ・藤原道長 (966-1028) 1007 金峰山埋納「経筒」 1024 有馬温泉
- ・白河天皇 (在位 1073-1086→1086 上皇・1096 法皇) 熊野参拝 9 回
- ・増誉 (1032-1116) 1090 「熊野三山檢校」←白河上皇
- 1072 成尋じょうじんが、天台山・五台山をめざして入宋。さんてんだいごだいさんき『参天台五台山記』
- 1106 高麗の太史官らが陰陽地理書を編集して『海東秘録』を著わす。かいとうひろく
- 1111 大江匡房 (1041-) 没。『本朝神仙伝』
- 1114 北宋きそウの徽宗しんしょうせつの宮廷で神霄説 (天界の構造に関する新説) と雷法らいほうが広まる。
- ・後白河天皇 (在位 1155-1158→1158 上皇・1169 法皇) 熊野参拝 34 回
- 1167 王重陽おうちやうやうが山東に移動し、呂洞賓りどうひん・鍾離権しやうりけんの教えをもとに全真教を創始。
- 1168 栄西 (1141-1215) が入宋。
- 1206 重源 (1121-) 没。 ※平重衡の南都焼討→造東大寺勸進職 ※行基説話
- 1221 承久の乱 (→上皇方についた寺社勢力の没落→勸進・聖の活動の活発化へ)
- 1223 道元 (1200-1253) が入宋。
- 1228 頃 南宋はくぎょくせんの白玉蟾はくぎょくせん(1194-)が内丹と雷法を集成。かいけいはくしんじんごろく『海瓊白真人語録』など。
- 1254 橘成季『古今著聞集』 ※有馬温泉、行基による温泉開基伝説、温泉と薬師
- 1274 一遍が遊行を開始、熊野本宮で熊野権現の夢告を受ける。
- 1281 院による熊野行幸の終了 →熊野山伏・比丘尼による勸進活動の活発化 (熊野三山本願所)
- 1289 一遍 (1239-) 没。
- 1320 度会家行 (1256-1361) 『類聚神祇本源』成立。伊勢神道を大成。るいじゅうじんぎほんげん
- 1445 明の武宗の勅命により、道教の一切経である正統『道蔵』が完成。しょうとう どうぞう
- 1467-1477 応仁の乱
- 1478 足利義尚あしかがよしひさが泰山府君祭を挙行。
- 1484 吉田神社に「大元宮」(全国の神々を勧請) 創設。吉田兼俱(1435-1511) 『唯一神道名法要集』よしだかねとも
- 1578~96 李自珍『本草綱目』→1604 伝来、1937 和刻本 ※温泉と硫黄
- 1610 朝鮮の韓無畏(1517-1610)が内丹書『海東伝道録』を著す。かいとうでんどうろく
- 1613 修験道法度
- 1666 朝鮮の洪万宗(1643-1725)が仙人伝かいとういせき『海東異蹟』を著す。かいとういせき
- 1673 明から来て黄檗宗の開祖となった隠元(1592-)没。いんげん
- 1711 貝原益軒 (1630-1714) 『有馬温泉記 (有馬湯山記)』
- 1768 内観法 (瞑想による修行法) を唱えた白隠禪師(1685-)没。『夜船閑話』など。やくせんかんなん
- 1809 柘植彰常『温泉論』 ※有馬温泉
- 1817 『諸国温泉効能鑑』(改訂版) ※草津・有馬・那須湯本・城崎など
- 1843 平田篤胤ひらたあつたね(1776-)没。『赤県太古伝』『黄帝伝記』など。せきけんたいこでん こうていでんき
- 1868 神仏分離令

1872	修験道廃止令
1879	<u>アントン・ヨハネス・コルネリス・ヘールツ『日本温泉案内』</u>
1880	<u>エルウィン・フォン・ベルツ『日本鉱泉論』、ヘールツ『日本温泉考』</u>
1886	<u>内務省衛生局『日本鉱泉誌』</u>
1945	神道指令

以下、上記年表を参照しつつ、概要を述べる。中国では、古くから各地で山岳や河川の神に対する祭祀が行なわれていた。戦国時代を終わらせて中国全土を統一した秦の始皇帝は、各地を巡幸して勢威を示しつつ各地で祭祀をおこない、泰山（山東省）では封禪をおこなった（BC219）。以後、漢の武帝や唐の高宗・玄宗など多くの皇帝が泰山で封禪をおこなっている。特に、中華世界の東西南北中央に鎮座すると観念される聖地としての五岳（時代的変遷はあるが、現在の五岳は東岳＝泰山（山東省）、南岳＝衡山（湖南省）、中岳＝嵩山（河南省）、西岳＝華山（陝西省）、北岳＝恒山（山西省）とされる）の祭祀は、国家祭祀の体系に組み込まれ、歴代の王朝において重要な位置づけを与えられた。後漢末期に現れた天師道の教団（教義や儀礼など多くの面で、道教の源流とされる）は、二十四「治」という各地をネットワーク化した組織を有していた。

多数の山岳聖地を体系的にネットワーク化する観念は、後に道教の「洞天福地」（神仙の統治する各地の山岳聖地に洞窟があり、それは仙界への入口・通路であると同時に他の山岳聖地・洞窟と相互に通じている。洞天は地上に実在する場所であると同時に地上とは異なった時空＝神仙の世界でもあり、神仙の降臨や經典・秘訣の伝授が起こる場所であり、仙人修行に適した優れた気の流れている場所である。その地上の配置は天界の星＝神の座の配置とも対応しているとも考えられる）として体系化される。その形成史の詳細については現在も研究と議論が続いているが、王屋山（河南省）とその山中の洞窟を聖地として崇拝する信仰を有していた天師道系の集団が、晋の南遷（西晋→東晋）とともに江南へ移動し、土着の宗教伝統と融合しながら、各地の山岳聖地をネットワーク化する信仰を形成していったと考えられる。それを主導したのは、王屋山で修行したと伝えられる魏夫人（魏華存）という女仙を崇拝し、茅山（江蘇省）を拠点に、多くの神霊の降臨を筆記して宗教文書を作成していた（おそらくは天師道系の）集団である。これに関連した宗教文書群は、陸修静が「三洞」説に基づいて道教經典を集成した目録を皇帝に献上した（467年）際には、「上清」經典群として最上位に位置づけられた。東晋の葛洪の『抱朴子』（317年）にはすでに後に「洞天」とされる多くの山岳の名称が紹介されているが、5世紀末に茅山に入った陶弘景（456～536年。道教のみならず、天文・暦・医薬・占・地理など諸学に通じ、梁の武帝の尊崇を受けた。著作に『神農本草經集注』『補闕肘後百一方』など）が、茅山における神霊の降臨記録を厳選して編纂した『真誥』^{しんこう}には、「洞天」の具体的

描写がある。これらをもとに、唐代の司馬承禎（647～735）の『天地宮府図』（『雲笈七籤』巻二十七所引）に於いて、十大洞天・三十六小洞天・七十二福地の体系が確立する。⁷

中国の宗教文化の日本への流入は、古くから連綿と続いてきた。記録が少ない時代の詳細はわからないが、5世紀の倭の五王（讚・珍・斉・興・武）の南朝への入貢、6世紀の百済經由の仏教伝来、7世紀からの遣隋使・遣唐使の派遣、唐・新羅の連合軍による百済の滅亡と百済遺民の大量移住、さらに高句麗や渤海をも含めた国際関係の中での律令国家形成過程などを考えただけでも、公式・非公式の多様なルートを介して、宗教や医学や天文暦法や占いや呪術の書籍や知識（しかもこれら多くの分野の知識は近代の学問領域のように明確に分かれているわけではなく、当時の書籍や個人の中では分かちがたく融合している部分が多い）が大量に流入していたことは確実である。ただし、このころの日本は、仏教を受容する一方で、唐の勢力範囲に組み込まれずに独立性を保つため、当時の唐の国家宗教（唐皇室の先祖祭祀）たる道教を公式に受容することには消極的であった。このため、日本には公式・組織的な道教の伝来はなかったと考えられている。したがって、個々の道教関連の信仰の要素や知識や文献が、倭の五王や遣隋使・遣唐使の時代から伝来していたかどうかを具体的に確定するのは難しい部分がある。とはいえ、日本では、6世紀～7世紀頃には山岳修行者が現れており、7世紀には役の行者（役小角）の山岳修行や信者の存在が記録されている。役行者は、賀茂氏の出身で、葛城を拠点に活動し、鬼神を使役する呪術を使い、弟子に訴えられて民衆を惑わせたかどで699年に伊豆へ流されたと伝えられる。⁸配流後の活動についてはよくわからないが、富士山や全国を巡って修行したという伝説が形成された。大宝律令（702）による山岳修行者の統制がおこなわれていることから、奈良時代には山岳修行者が増加していたことがわかる。9世紀初めの成立と考えられる『日本霊異記』には、

「役優婆塞者，賀茂役公，今高賀茂朝臣者也。…仰信三宝，以之為業。每庶掛五色之雲，飛仲虛之外。携仙官之賓，…吸啖養性之氣。所以晚年以四十余歲，更居岩窟，被葛餌之松，沐清水之泉，
濯欲界之垢，修習孔雀之咒法，証得奇異之驗術。驅使鬼神，得之自在。唱諸鬼神而催之曰，
大倭国金峰与葛木峰，度椅而通。…」

とあり、「優婆塞」「三宝」「五色の雲」「孔雀の咒法」仏教・密教のイメージとともに、仙人・仙界（「飛仲虚之外。携仙官之賓」）、気の吸入や辟穀（穀物を絶ち松などの木の実やキノコや雲母などを食して身心の気を変化させる）などの養生術（「吸啖養性之氣」「被葛餌之松，沐清水之泉」）、仙術（「驅使鬼神，得之自在」）、おそらくは山中の岩窟における修行（「更居岩窟」）、大和葛城山と吉野金峰山を（鬼神に命じて）連結した（「唱諸鬼神而催之曰，大倭国金峰与葛木峰，度椅而通。」）など、道教系の山岳信仰や洞天説の影響を濃厚に感じさせるイメージが現れ

ている。

時代は少し下るものの、宇多天皇寛文年間（889—897）成立の藤原佐世（？—892）『日本国見在書目録』には、道家類として、『老子』（河上公注、王弼注、唐玄宗御注…）、『太上老君玄元皇帝聖化経』、『莊子』（司馬彪注、郭象注…）、『南華仙人莊子義類』、『列子』、『抱朴子内篇』、『広成子』、『本際経』、『太上靈寶経』など、五行家類として『三甲神符経』、『太一経』など、医方家類として『黄帝素問』、『黄帝八十一難経』、『太清神丹経』、『太清金液丹経』、『神仙服薬食方経』、『五岳仙薬方』、『葛洪肘后方』、『葛氏百方』、『葛氏肘后方』など、多数の道教関連の文献（上述の葛洪や陶弘景の著作も見られる）が記録されている。無論、『日本国見在書目録』に記載されていない道教文献も多くあるため、道教系の知識が網羅的に流入しているとはいえないものの、上述のような用語の使用、山岳修行者の拡大、8世紀の行基の遊行や勧進活動に代表される宗教と社会の状況、入唐留学生や多数の渡来人の存在、さらに唐・新羅・日本の商人や宗教関係者などによる非公式の往来活動も想定できることなども考えあわせれば、仏教の知識や文化とともに、道教系の呪術や山岳信仰の知識や文化は、日本の山岳宗教や修験の形成期から流入していると考えられる。

真言宗や天台宗と山岳信仰・修験の関わりについても、ごく簡単に整理しておく。空海（774—835）は、大滝岳、室戸岬、金峰山など、山岳や洞窟や海岸などで修行したと伝えられ、唐の長安で密教を学んで帰国した後は、高野山を開いていることからわかる通り、山岳修行と密接な関係を有している。⁹ 真言宗の聖宝理源（832—909）は、役行者にならって金峰山で修行し、金峰山の整備をおこなった。このため、役行者以来の「修験道再興者」とのイメージが確立し、後に修験道の当山派（醍醐寺三宝院）の開祖とされた。

最澄（767—822）が比叡山を天台宗の本拠とした後、円仁（794—864）、円珍（814—891）など比叡山で修行した高僧は多数にのぼる。下野（栃木）出身の円仁は、比叡山で修行した後、最澄に従って東国を布教して巡っている（816年）。838年に遣唐使船で唐にわたると、五台山を巡礼し、長安に行き、会昌の廃仏（845年）に遭遇、847年に山東省を經由して帰国している。その記録が『入唐求法巡礼行記』である。円仁は長安に向かうときにも帰国するときにも苦労しているが、その際に山東の新羅人集団（張保臯／張宝高（790頃～846?）が率いていた海上勢力）の支援を受けており、山東省の赤山の信仰（赤山神）も持ち帰っている。¹⁰ このように巡礼や山岳信仰と関係が深い円仁は、帰国後にも各地に寺院を開基したと伝えられ、円仁による開湯伝説も多いが、行基や弘法大師空海と同様、虚実ないまぜのイメージが形成されている。天台宗の相応（831—918）は法華経を持し断穀や回峰行をおこなった。大納言藤原経輔を父とする天台宗の増誉（1032—1116）は、葛城山・大峰山で修行したと伝えられる。白河上皇の熊野参詣の先達をつとめ、1090年には初代「熊野三山検校」に任じられ、聖護院を建立した。この

系統が本山派である。

平安末頃までに、吉野金峰山（御岳。役行者と「金剛蔵王権現」湧出の伝説）、熊野（本宮・新宮・那智。「熊野十二所権現」）のほか、木曾御嶽、伯耆大山、羽黒、白山、日光、富士、彦山などでも修験・山伏の組織的活動が行なわれるようになっていた。吉野や熊野では、藤原道長（966-1028）による金峰山での「経筒」埋納（1007）、白河天皇（在位 1072-1086→上皇・法皇）の熊野参拝（9回）、後白河天皇（在位 1155-1158→上皇・法皇）の熊野参拝（34回）など貴族や天皇・上皇・法皇との結合による隆盛をみた。

鎌倉から室町（12世紀～15世紀）にかけて、修験の各山では、開山縁起が作成され、崇拝対象・儀礼・組織が整えられた。鎌倉初期成立の『諸山縁起』の「金峰山本縁起」は、役小角の開山伝承とともに、大峰山中には120の「宿」と380人の「仙人」が存在し、三重の「岩屋」（下；阿弥陀曼荼羅、中；胎蔵界曼荼羅、上；金剛界曼荼羅）があるとし、道教的要素も抱負である。「金峰秘密傳」（鎌倉中期）には、役小角が金峰山で「金剛蔵王権現」の湧出に出会う説話が現れる。¹¹

九州の英彦山（1792年、霊元法皇の院宣により「彦山」を「英彦山」に改称）に関しては、「彦山流記」（1213）に、役小角、蓬萊山、崑崙山、彦山、寶満山、西王母石室といったことが現れている。また、さらに下って「彦山縁起」（元禄7年1694）には、継体天皇25年（521年）に北魏の善正によるという開基伝説、「四十九窟」の存在が記されている。¹²

3 温泉信仰——温泉行幸・地獄・地藏・薬師信仰・湯治文化

中国の西安近郊の驪山温泉の「華清池」は、白居易の「長恨歌」などによって日本でも有名な唐の玄宗と楊貴妃の故事の舞台であり、現代では観光地となっている。驪山に温泉があることは戦国時代以前から知られていた。秦の始皇帝が自らの陵墓として死後の地下宮殿を作ったのも驪山である（秦の都の咸陽は、驪山と西安の近くである）。始皇帝は、中国を統一（BC221）すると全国を巡行してその勢威を顕示しつつ、各地で祭祀をおこなっており、BC219年には泰山で中国全土の支配者として天を祀る「封禪」を挙行している。『史記』には「二十七年（BC219）、始皇巡隴西、北地、出鷄頭山、過回中。・・・更命“信宮”為“極廟”、象“天極”。自“極廟”道通“驪山”、作“甘泉前殿”。」という記述もある。「天極」に繋がる「甘泉」というイメージが存在していることになり、驪山の温泉が聖性を帯びていることがうかがえる。驪山温泉については、後漢の張衡の「温泉賦」¹³、唐の太宗（李世民）の「温泉銘」といった作品も存在し、神仙のイメージと結びついている。不死の神仙世界に通じる聖地としての温泉と皇帝・国家との結びつきという観念が、おそらくは遣隋使・遣唐使のルートを介して時代に日本に流入し、

『日本書紀』に記録される舒明天皇や孝徳天皇の有馬温泉行幸に影響している可能性を想定できる。¹⁴ こうした観念は、温泉も瀧も、熱／冷の差異はあれ、神霊につながる聖なる水の聖地としてみるならば、後の天皇・上皇・法皇の熊野参詣などにも連続と流れている感覚であるかもしれない。

温泉と宗教の結びつきのわかりやすい実例として、温泉寺・温泉神社の存在がある。温泉神社には、大己貴（大国主）と少彦名を祭神とする例が多いが、日本の神社の祭神は江戸・明治以降に設定されたものも多く、また、仏寺・神仏習合であったものが、明治期に神社に変えられてしまった例も多いので、個別の事例ごとに注意が必要である。『延喜式』『神名式』（967）には、有馬温泉の「湯泉神社」、伊香保温泉の「伊香保神社」、那須湯本温泉の「温泉（ゆぜん）神社」、鳴子温泉の「温泉神社」、道後温泉の「温泉神社」などの例が載っており、温泉神社のもともとの形態は、地元の温泉の「湯の神」を祭祀したものであろうという見方が強い。

温泉と地獄・地藏・薬師信仰の結びつきについてもみておきたい。中世から現代に至るまで、温泉周辺の火山性ガスや熱蒸気の吹き上がる場所は、その景観や動植物の枯死の実例などから「地獄」「賽の河原」などと呼ばれ、地獄から救済してくれる地藏の信仰と結びついている例は多い。現代の温泉地でも、箱根大涌谷、恐山など多くの例があるが、各地の温泉と地獄・地藏との結びつきについては、それぞれ固有の歴史や変遷があり、単純に一般化はできない。¹⁵

日本では、源信（942-1017）の『往生要集』（985年）を画期として、具体的な地獄・極楽のイメージが流布していったといわれる。10～11世紀に中国で成立・流布したらしい『預修十王経』によって、日本にも地獄の裁判官である十王（閻魔を代表とする）がもたらされた。しかし、浄土教系の聖の活動などにより、地獄からの救済者としての地藏菩薩への信仰が強かった日本では、『預修十王経』をそのまま受容されることなく、12世紀頃に、十王のそれぞれに本地仏が設定された『地藏十王経』が成立し、閻魔の本地仏を地藏とする信仰が広まり、地獄・十王信仰と地藏信仰が結合することになったようである。

温泉と薬師の結合については、薬師如来が治病の仏であるところから、温泉との結びつきは自発的なものとみなされがちであるが、この結合は歴史的に特定の場所（有馬温泉）で形成され、有馬温泉と熊野の結びつきを背景に、聖や比丘尼の活動を介して意図的に全国化していったものと考えられる、という指摘が、西尾正仁（注1、前掲書）によってなされている。それによれば温泉薬師信仰の形成史は以下のように整理される。

・温泉薬師信仰の源流となったのは有馬で発生した行基開湯伝説であり、¹⁶ その伝承が縁起に移植されていた昆陽寺（伊丹）の再興のために集まっていた重源らの勸進聖の集団が伝承の二次管理者となり、さらに東大寺の勸進に参加していた山岳宗教者（山中で温泉を発見し経営するものを含んでいた）が昆陽寺の勸進聖との交流を介して行基伝説の伝播を担うとともに、

自らの経営する温泉にその伝説を持ち込み、薬師如来を祭祀するようになり、いったん成立した薬師如来の祭祀は行基開湯伝説をもたない温泉にも広がっていった。

・これとは別に、南北朝以降、京都貴族の没落によって困窮した熊野ではより広範な層への熊野信仰の浸透を図って勧進活動を展開するようになり、そこに時宗系の勧進聖が流入し、熊野や温泉と深い縁のある一遍を受け継ぐこれらの勧進聖は湯峰温泉に入って経営に着手するとともに関東地方で醸成中であった小栗判官伝説を湯峰温泉と結合して完成させ、これによる唱導を展開した。

・応仁の乱以降、有馬温泉では貴族の来訪が減少するとともに、度重なる火災により荒廃が進んだため、温泉寺と温泉の復興のための勧進活動が活発化し、そこに熊野から加わった者たちは、温泉経営の奪取をはかり、先行の行基開湯伝説や尊恵蘇生譚に対抗して仁西（熊野山伏）による有馬再興伝承を作り出して正統性を主張した結果、有馬に熊野信仰が浸透した。一方、有馬と熊野の交流が盛んになると、有馬で形成された地獄と薬師の結びつきや行基開湯伝承も熊野へ持ち込まれてゆくことになった。

温泉と地獄・地藏信仰の結びつきの例と同様、温泉と薬師信仰の結合についても、個別の事例ごとに考察することが必要ではあるが、明確な温泉薬師信仰が有馬で形成されたものであること、勧進聖や熊野との結びつきなど、大筋としては的確な見方であろう。

温泉・湯治場では、行基・空海・円仁・役行者などの山岳修行や広範な布教巡礼のイメージの強い宗教者、地藏や薬師などの神仏やその使いとしての動物、源頼朝や武田信玄など有名武将などに結びつけられた開湯伝説、源泉と結びついていることの多い共同湯および湯治場、薬師や地藏や観音などを本尊とする温泉寺や温泉神社、温泉の効能や神仏の加護による「治癒」の実績と信仰とが結合し、これに旅館経営や観光・巡礼・旅行などの要素が加わって、聖俗兼ね備えた「治癒文化」が現出している。これらの起源には古代や中世までさかのぼることができるものも多いが、新しい要素や変化も多く、特に湯治や旅や巡礼が階層・規模ともに飛躍的に大規模化するの江戸時代以降であり、鉄道開発と結びついた大規模観光・保養地化が進むのは明治以降である。

結び

以上、「治癒文化」の広がりという観点から、道教と修験を中心とする中国と日本の山岳信仰の歴史、中国の温泉と日本の温泉、日本における温泉信仰について、ごくおおまかではあるが基本的な整理を試みた。日本独自の要素や差異があまたあるのはもちろんであるが、中国の山

岳信仰や温泉のイメージが日本の山岳信仰・温泉文化に与えた影響もかなり大きなものであったことが明らかになったと思われる。一方で、火山や鉱山との結びつきや、各時代の「湯治」の実態や江戸明治以降の大規模化の経緯、明治政府の宗教政策がもたらした修験道への巨大な影響と第二次大戦後の変化など具体的に触れなかった要素も多い。最も大きな課題としては、中国でも日本でも、山岳信仰は海洋信仰とも結びついているという問題がある。天空に繋がる高地としての山岳と、水平線の彼方の異世界に繋がる海とは、宗教的イマジネーションにおいて共通・結合する部分を持つ。また、海から見えやすく航海の目印になる山岳の役割やその山への信仰、熊野の山岳信仰と渡海、陸路と海路の移動・交易・布教のルートなど、実際の自然環境や地形や人々の活動に関する事例も数多い。これらについても、今後の課題として研究を継続することとしたい。

¹ 温泉と薬師信仰の結びつきについての詳細な研究として、西尾正仁『薬師信仰—護国の仏から温泉の仏へ』岩田書院 2000 がある。

地質学や医学など科学的視点からの研究、経済史や社会史的や観光学な研究や一般向けの書籍などはもとより膨大で紹介しきれないが、本論の関心に近く総論的なものとして、日本温泉科学会編『温泉学入門—温泉への誘い—』コロナ社 2005、日本温泉文化研究会『論集温泉学Ⅰ 温泉の文化誌』岩田書院 2007、同『論集温泉学Ⅱ 湯治の文化誌』岩田書院 2010、同『論集温泉学Ⅲ 温泉の原風景』岩田書院 2013、同『温泉をよむ』講談社学術文庫 2011、高橋陽一『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉』、石川理夫『温泉の平和と戦争』彩流社 2015、同『温泉の日本史』中公文庫 2018 などを挙げておく。

定期刊行の研究誌として、日本温泉科学会『温泉科学』（1941～続刊）、日本温泉地域学会『温泉地域研究』（2003～続刊）がある。各学会の HP には、最新の活動や成果報告のほか、温泉研究に関する参考文献一覧も掲載されており参考になる。

日本温泉科学会 <http://www.j-hss.org/>

日本温泉文化研究会 <https://onbunken.jimdofree.com/>

日本温泉地域学会 <http://onsenchiki.web.fc2.com/>

辞典類としては、野口冬人編『全国温泉大事典』旅行読売出版社 1997、阿岸佑幸編『温泉の百科事典』丸善出版 2012、大石真人編『全国温泉辞典』東京堂出版 1981、浦西和彦編著『温泉文学事典』和泉書院 2016 などがある。

² 日本の山岳信仰・山岳宗教・修験道の研究史は、膨大な蓄積がある。柳田國男から、和歌森太郎や五来重、宮家準などによる、広い視野と豊富な事例からなる総合的な研究が、その研究方法や問題意識を継承するにせよ、批判的に再検討するにせよ、まずは基本ベースとなる。先行研究の方法論を批判的に再検討する必要を明確に打ち出しているものとして、時枝務・長谷川賢二・林淳（編）『修験道史入門』岩田書院 2015 がある。以下、網羅的に挙げることはできないが、基本的な研究文献を記しておく。

和歌森太郎・五来重『山岳宗教史研究叢書』全 18 巻、名著出版 1975～1984。和歌森太郎『修験道史研究』河出書房 1943、東洋文庫 1972 『山伏』中公新書 1964。五来重『山の宗教 修験道』淡交社 1970、『五来重著作集』法蔵館 『熊野詣 三山信仰と文化』『石の宗教』五来重、講談社。宮家準『修験道儀礼の研究』春秋社 1971、増補決定版 1999、『修験道思想の研究』春秋社 1985、増補決定版 1999、『修験道組織の研究』春秋社 1999、『修験道の地域的展開』春秋社 2012、『修験道—その歴史と修行』講談社学術文庫 2001、『霊山と日本人』、『日本の民俗宗教』講談社、『修験道—その伝播と定着』法蔵館 2012。村山修一『山伏の歴史』塙書房 1970、『日本陰陽道史総説』塙書房 1981、『修験・陰陽道と社寺資料』法蔵館 1997。鈴木正崇『山岳信仰』中公新書、『明治維新と修験道』（『宗教研究』392 号、2018 年）。日本山岳修験学会 www.sangakushugen.jp/ 『山岳修験』（1985～、年二回発行）。鈴木昭英『修験道歴史民俗論集 1 修験教団の形成と展開』法蔵館 2003、『霊山曼荼羅と修験巫俗』法蔵館 2004、『越後・佐渡の山岳修験』法蔵館 2004。銭谷武平『役行者伝記集成』東方出版 1994。森毅『修験道霞職の史的研究』名著出版 1989。大和久震平『古代山岳信仰遺跡の研究』名著出版 1990。宮本袈裟雄『里修験の研究』吉川弘文館 1984（岩田書院 2010）、『天狗と修験者 山

岳信仰とその周辺』人文書院 1989、『里修験の研究 続』岩田書院 2010。新城美恵子『本山派修験と熊野先達』岩田書院 1999。時枝務『修験道の考古学的研究』雄山閣 2005、『霊場の考古学』時枝務、高志書院選書 2014、『山岳宗教遺跡の研究』岩田書院 2016、『山岳霊場の考古学的研究』雄山閣 2018。時枝務・長谷川賢二・林淳(編)『修験道史入門』岩田書院 2015。林淳『近世陰陽道の研究』吉川弘文館 2005、「神仏混漚から神仏習合へ」(芳賀祥二編『近代日本の地域と文化』吉川弘文館 2018)。

³ 土屋昌明研究代表「中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2009-2011)、「中国道教の地理的イメージと宗教的ネットワークに関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2012-2015)、「中国道教における聖地と巡礼に関する総合的調査と研究」(基盤研究(B) 2016-2018)、「道教の洞天思想における聖地と巡礼の調査研究およびその東アジア思想文化史への影響」(基盤研究(B) 2019-2021)。筆者はこれまでに、科研の共同調査として、中国の赤城山(浙江省)、委羽山(浙江省)、括蒼山(浙江省)、蓋竹山(浙江省)、嵩山(河南省)、華山(湖南省)、終南山(陝西省)、王屋山(河南省)、茅山(江蘇省)、羅浮山(広東省)、廬山(江西省)、西山(江西省)、麻姑山(浙江省)など、個人調査として青城山(四川省)、峨嵋山(四川省)、恒山(河北省)、泰山(山東省)、武夷山(福建省)、勞山(山東省)、赤山(山東省)などを調査した。洞天福地については、三浦國雄『洞天福地小論』『東方宗教』61号、1983(『風水一中号人のトポス』平凡社ライブラリー1995)、Stephen R. BOKENKAMP, *The Peach Flower Font and The Grotto Passeege*, *The Journal of the American Oriental Society* 1986、Terry F. KLEEMAN, *Mountain deities in China: the domestication of the mountain god and the subjugation of the margins*, *The Journal of the American Oriental Society* Vol.114 No.2 (April-June 1994) pp.226-238、李遠国「洞天福地：道教理想の人居环境及其科学価値」(『西南民族大学学報』2006/12)、木健郎「洞天的基礎的考察」(田中文雄・テリー・クリーマン編『道教と共生思想』大河書房、2009年)、洞天福地研究会『洞天福地研究』1-8号、2011年-2019年(継続刊行中)所収の諸論文などを参照。

⁴ 中国の火山については、江原幸雄『中国大陸の火山・地熱・温泉』九州大学出版会 2003などを参照。

⁵ 桂博史『中国温泉探訪記』岩波書店 2007は、中国の温泉の歴史と現状について、日本の温泉の歴史との対比もおこないつつ、紹介・考察している。

⁶ 例えば、「修験道の開祖」として伝説化されている役行者が、妖言をなしたかどで 699年に伊豆に流されたとする日本書紀の記録などから、山岳修行者・信者集団の存在、ある程度の規模の宗教活動が推測されている。

⁷ 『道蔵』22-198。文中に司馬承禎への言及を含むため、後世の改変が加えられていると考えられるが、基本的には司馬承禎の著作とみなす。司馬承禎による洞天福地は唐の領土に広く分布し、特に江南地域に集中しているが、洛陽近郊の王屋山が第一洞天とされ、伝統的な国家祭祀の対象である五岳が「小洞天」の第二～第五として「十大洞天」の下位に位置づけられているなどの特徴がある。これは、上述のような洞天信仰形成の経緯、および道教を皇室の先祖祭祀と結合した国家宗教として位置づける(李姓の老子を唐の皇室の先祖とし、唐の建国に際して老子の助けがあったという伝説を流布し、各地に道観を設置し、道土による儀礼をおこなう)ことで仏教勢力や名門貴族勢力を抑制しつつ皇室と国家の権威を高めるという政策を反映している。

⁸ 「役君小角、流於伊豆島。初小角住於葛木山、以咒術称。外従五位下韓國連広足師焉。後害其能、讒以妖惑、故配遠处。世相傳云「小角能役使鬼神、汲水採薪。若不用命、即以咒縛之」(『続日本紀』文武天皇三年(699))

⁹ 高野山の開山伝説では、空海が真言密教に最もふさわしい土地に落ちよと念じて唐の長安から投げた三鈷所が、狩場明神の使いである二匹の犬の導きで、松の木に引っ掛かっているのを発見したとされ、温泉発見伝説の典型の一つである(神の使いとしての)動物発見説話と共通するパターンを示している。

¹⁰ 京都の赤山禅院は、円仁の遺志によって建立された寺院で、赤山明神を祀る。

¹¹ 中世の山岳宗教・修験は法華経との関わりが深く、金剛蔵王権現が「湧出」するのは、妙法蓮華経の「従地湧出品」での菩薩の出現をトレースしたものと考えられる。

¹² 中野幡能「英彦山と九州の修験道」(山岳宗教史叢書13)などを参照。筆者は、2018年に英彦山を調査したが、般若窟など英彦山中の洞窟やそこに立てられたお堂などの環境や形状は、中国の諸洞天に見られるものと非常に類似している。

¹³ 張衡『温泉賦』「陽春之月、百草萋萋。余在遠行、顧望有懷。遂適驪山、觀温泉、浴神井、・・」。張衡は中国科学史の著名人であり、天文・暦法・数学・地理などに顕著な業績を残している。文学作品には「埤田賦」などがある。

¹⁴ 桂博史、前掲書参照。同書では、『日本書紀』の温泉に関する記事の文が『水経注』の直接的影響を受けていることも指摘されている。

¹⁵ 宮崎ふみ子「霊場 恐山の地蔵と温泉」『論集温泉学 I 温泉の文化誌』岩田書院 2007によれば、恐山

の霊場には薬師信仰から地藏信仰へ変遷がみられるという。そのほか、柘植信行「中世箱根における温泉と地藏信仰」(『論集温泉学Ⅱ 湯治の文化誌』岩田書院 2010、柘植信行「中世「熱海」の信仰空間—温泉を背景とした霊場の形成と展開—」(『論集温泉学Ⅰ 温泉の文化誌』岩田書院 2007)などを参照。

¹⁶ 温泉薬師信仰に関する最古の明確な伝承は、『古今著聞集』(1254)に見える昆陽寺(大阪伊丹)の開基伝承(行基が有馬に向かう途上で、「温泉の行者」を名乗る生身の薬師と出会うという説話)であること、各温泉の開湯伝承では行基によるとするものの分布が顕著であり、しかも薬師如来と関係が深いことから、温泉薬師信仰の源流は有馬での行基開湯伝承であるとする。さらに、その伝説は12世紀に有馬温泉を開発・運営した天台系の聖が作成し、街道筋の昆陽寺へ持ち込んだものと推測している。

草津の温泉文化

——湯治・ハンセン病・被差別部落——

川上 隆志

1 現代社会に蔓延する差別と排除

相次ぐヘイトクライム

2019年3月17日、本稿執筆中にニュージーランドで事件が起きた。白人至上主義者と思われる者によるイスラーム・モスクへの乱射事件である。無差別の攻撃によって無辜の人間が50人も亡くなった。オーストラリア国籍の容疑者は、かねてよりアジアやアフリカからの移民の増大を憂慮していたという。そして2011年にノルウェーで起きた白人至上主義者の無差別テロに影響を受けていたと報道されている。さらに4月には社研で訪れたスリランカでテロが起きた。こうした忌まわしい事件の連鎖は世界中で続いている。

排除と差別の流れは、アメリカのトランプ大統領の誕生とその言動がシンボリックであるが、それ以前からアメリカでは伏流水のように存在しているし、ブラジルでの極右政権の誕生やイタリアやドイツなどで顕著になってきたヨーロッパにおける移民排斥の流れなど、いまや世界中で爆発的と言っていいほどに拡大している。

この差別と排除の対象は「人種」だけではない(注1-1)。マジョリティによるマイノリティへのさまざまな差別が存在している。女性、少数民族、障がい者、LGBTQなど枚挙にいとまがない。

それでは日本ではどうだろうか。日本国内での典型的なものとしては在日韓国朝鮮人、沖縄、アイヌ、被差別部落、ハンセン病、被爆者などへの差別と排除が存在している。さらに近年では、移民として移住してきた日系人やイスラーム教徒も差別される様相も出てきた。もちろんLGBTQへの偏見と差別は無くなっていない。とりわけ有力政治家などの暴言や失言もあり、マイノリティへの差別と排除の流れは決して止まっていないのが実情である。

草津とハンセン病

この憂うべき世界と日本の情勢をどのようにすれば変えることができるのか。もちろん簡単な答えは見つからないが、身近なところに存在している、あるいは存在していた過去の事例を検討してみることで克服の道が見えてこないだろうか。

ハンセン病患者への差別と排除はかつて厳しいものがあった。2001年の小泉内閣の時代に、政

府による謝罪と補償が行われたが、その後も差別事件は起きている（注1-2）。

しかし群馬県の草津温泉には、長い間にわたってハンセン病者と一般人が混湯してきた歴史がある。今この時代に、あらためて草津温泉がハンセン病患者たちと共存してきた歴史をたどり、あわせて被差別部落が温泉文化に果たしてきた役割を見直してみたい。

私たちの研究グループでは、治癒文化として温泉の研究をさまざまな角度から行ないたいと考えているが、本稿では草津温泉における他者との共存の在り方を検討していく。

2 草津における湯治の歴史

臭い水

温泉がさまざまな医療的な効用を持っていることは言うまでもない。洋の東西を問わず温泉療法は存在している。しかし日本のように全裸になって湯船に浸かり、場合によっては男女も混浴するのは極めて特異といえよう。世界の主流は、浴槽に水着を着用して入るスタイルである。家族や友人たちとのんびりと談笑しながらプールのような温泉に入って体を温めている。

日本での温泉湯治にはさまざまなスタイルがある。本格的な温泉病院もあれば、病気療養のために滞在する人もいるし、農閑期に鍋釜を持って長期滞在して骨休めをする農家の人たちもいる。病気療養のための温泉場として、群馬県渋川市にあるにある釈迦の霊泉は、仏教系の宗教法人で、万病に効くということを謳い、特に末期がんの方たちが多く訪れ療養をしている。

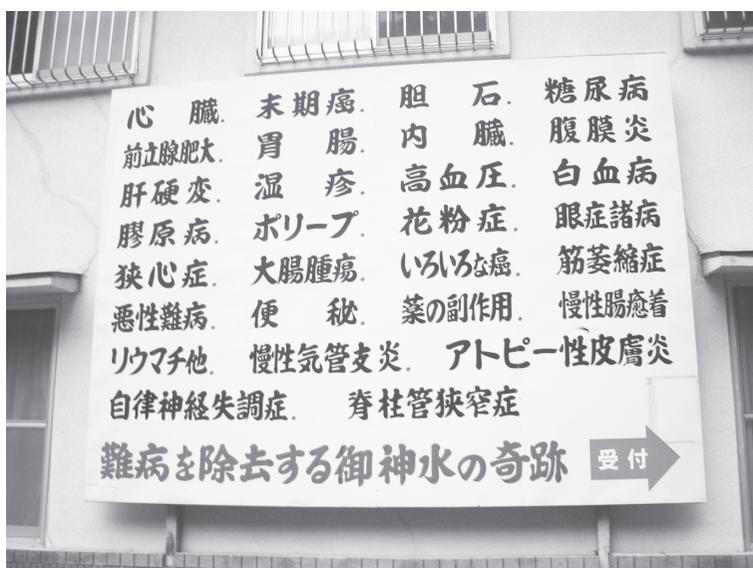


写真1 釈迦の霊泉の入口に書かれている効能。実にたくさんの病気に効くようだ。

実際に泊まってみると、多くの患者が静かに湯治していた。ただし病気のことはお互いに聞いたり話したりしないのがルールとなっている。

では草津温泉の湯治方法はどのようなものなのか。それは極めてユニークなスタイルなのだが、それを説明する前に草津温泉の歴史と特質を見ておいた方がよいだろう。

草津温泉はその背後に白根山と本白根山という火山がある。現在でもたびたび噴火が起きている活火山である。火口周辺や殺生河原と言われる溶岩地帯などでは硫黄ガスが噴出している。この強烈な硫黄臭が「臭い水」「くそうず」「くさつ」と変化して、草津という地名になったという（注 2-1）。

火山によって温められ、さまざまな成分が溶け込んだ地下水が温泉となって噴出したのが草津温泉最大の源泉・湯畑である。草津温泉は湯畑を中心として周囲に温泉街が形成されてきた。標高も 1200 メートルという高地にある。

開湯伝説

草津の開湯伝説には次のようなものがある。もっとも古い伝説は日本武尊に関わるものだが、それは明治になって創作されたものなのであまり意味がない。草津温泉の歴史が書いてある光専寺の縁起によれば、養老 5 (721) 年、行基が東国巡行の折に人々に浴場の法を教えたのが開湯であるという。奈良時代に全国で土木事業を行なった行基にまつわる開湯伝説は各地にある。次いで建久 8 (1197) 年、源頼朝が浅間山麓で狩りをしていた時に熱湯が湧くと告げられ、大きな石に座ったところ温泉が湧きだしたという。この温泉が草津の五湯と呼ばれる湯小屋の一つ、御座の湯である（注 2-2）。

このような開湯伝説はあるものの、実際に草津温泉の名を世に広めたのは、白根山を修行の山としていた修験者たちである（注 2-3）。平安時代の終わりごろの 11 世紀から 12 世紀には、白根山を霊場として白根明神を祭る修験者がいた。その修験者たちの沐浴場として温泉が利用されていたのである。源頼朝による開湯伝説と合わせて考えれば、平安の末に草津温泉が修験者たちによって開かれたと言えよう。

中世になると土豪の湯本氏が草津一帯を支配していた。草津温泉を支配下におさめ、それが財政的な収入源となり土豪として力を蓄え、甲斐の武田氏に属しながら信濃の真田氏と手を組んだ。一族は草津温泉の経営実権を掌握し、武士団となった一団と旅館経営をしながら温泉場の行政を支配する一団とに分かれていった（注 2-4）。

室町時代から戦国時代にかけて著名な人たちの入湯記録がある（注 2-5）。布教のために行脚した僧侶たちとして、文明 4 (1472) 年には本願寺の蓮如上人、延徳 3 (1491) 年には相国寺の万里集九、天正 15 (1587) 年には本願寺の顕如、教如などがいる。

また豊臣一族も草津に入湯している。秀吉本人が入湯を決め、通行道中の計画を命じ触書を出している。秀吉と言えば播州有馬温泉での湯治が有名であるが、草津温泉へも側近を含めて300人規模での湯治を計画していたのだ。秀吉の計画は実現しなかったが、養子の秀次や異父妹の朝日姫が入湯している。豊臣一族へ草津温泉を紹介したのは、湯本氏とかかわりの深かった信濃の真田昌幸ではないかと萩原進は推測している。その他、前田利家や朝鮮侵略帰りの武将も多く入湯している。こうしたことから、この時期にはすでに草津温泉の名が全国に轟いていたことがわかる。

そして草津の歴史に名高い戦国大名、大谷刑部少輔吉継がいる。大谷刑部は文禄3（1594）年に草津に湯治に訪れている。大谷刑部はハンセン病を患っており、すでに視力が衰えていて、その治療に訪れたのであった。この頃には草津温泉とハンセン病との関係は世に広く知られていたと思われる。

江戸時代になると草津は幕府直轄の天領となった。村名主は伊左衛門、湯守は湯本安兵衛、湯本角右衛門、年寄は湯本平兵衛で、湯本三家が有力な大屋だった。明和元（1764）には家数150軒、人数807人とあり、天明8（1788）年にはそれぞれ182軒、707人、天保2（1841）年には181軒、681人だった（注2-6）。

江戸が政治の中心となり草津温泉も庶民の湯治客で大いに賑わった。高野長英、佐久間象山、清河八郎、小林一茶、鈴木牧之、十返舎一九などの文人や雅人も多く訪れた。元禄のころより草津の五湯として御座の湯、脚気の湯、鷲の湯、綿の湯、滝の湯が挙げられ、それぞれの効能が記されている。中でも御座の湯は、ハンセン病の人たちが入る湯として知られていた（注2-7）。

近代の草津

明治になって草津温泉の支配構造が大きく変わる。明治2年の旧暦4月7日、草津は大火に遭い、全集落を焼き尽くされた。未曾有の大火災によって有力な大屋旅館は大きな痛手を受け、経営者が交代をした。唯一、湯本柳三郎（旧名湯本安兵衛）が多額の借金はしたものの旅館を存続し、現在でも日新館として営業を続けている（注2-8）。

特筆すべきはベルツ博士である。エルウィン・フォン・ベルツは、ドイツからのお雇い外国人として来日した。明治9年に東京医学校（現東大医学部）で講義し、天皇や皇太子の侍医でもあった。ベルツは日本各地の温泉地をめぐり、温泉療法を提唱した。草津温泉におけるハンセン病患者などの湯治を見て、草津の自然環境の良さに着目し、新たな温泉保養地の建設を提唱したのだった（注2-9）。

大正年間には草津電気鉄道が敷設され、軽井沢から草津温泉まで軽便鉄道が開通した。ただ

しこの鉄道には忌まわしい歴史もある。湯治に行くハンセン病者の乗車を拒否するということがあった。そのため昭和初期でも多くの患者が乗車拒否され、数十キロの距離を線路伝いに歩いて行ったという（注 2-10）。さらに昭和 20 年の敗戦直前には渋川から長野原まで鉄道が開通した。昭和になると道路も整備され、交通網が整っていったのである。

明治の末に日本に導入されたスキーは、志賀高原や草津へと広がりを見せた。草津では昭和の初めからスキー場が形成され、雪質の良さを売りにして高原リゾートとして発展してゆくことになる。

近年では白根山の噴火によってロープウェイや一部ゲレンデが廃止になるなど、客の減少が心配されている。2019 年 3 月現在では火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）となっている。

無料の共同浴場と時間湯

草津のユニークな特徴として、町のいたるところに無料の共同浴場がある。この共同浴場の由来と歴史を見ておこう。草津では「湯は皆のもの」という意識があった。萩原進は中世から江戸時代までを「共同所有時代」として共同体的な所有が前提としてあり、入浴も無料でさまざまな人（ハンセン病者も含めて）が混湯をしていたとする（注 2-11）。江戸時代半ば以降、草津温泉でも内湯を持つ大屋ができてくるが、それでも無料の共同浴場は維持されている。

明治 5（1872）年、政府は土地所有権を証明するために壬申地券を交付した。その際、草津温泉の源泉、浴場はすべて「村持」となっている。その後、草津の主要な源泉は官有とされ、大正 11（1922）年に群馬県に払い下げられ、県と草津町の間で賃借契約が結ばれた。今では草津町が引湯許可権を持っていて、各旅館やリゾート施設等から使用料・管理料を徴収している（注 2-12）。

草津温泉の湯の特徴について述べておく（注 2-13）。それは何と言っても全国有数の強い酸性の湯であることだ。『草津温泉誌 自然・科学編』の中で小嶋碩夫は「草津温泉は同一泉源で多量の温泉が出ていて、然も酸性が強い。（中略）こんな酸性の強い温泉を健康或いは治療のために使用するというのは、わが国独特のものである」と述べている。同書には各源泉の pH 数値も出ているが、1.3 前後ときわめて酸性が強い。それだけ殺菌性が強いということになる。

草津温泉には独特の入浴法がある。それは時間湯という入り方である。入浴客がそろって板で湯を揉んで、温度を下げてから柄杓で 100 回から 200 回、頭に湯をかけるかぶり湯をする。その後、高温の湯に 3 分間浸かる。それを 1 日 4、5 回繰り返すという入浴法である。湯揉みは高温の湯に入るためのウォーミングアップ、かぶり湯は脳の血管を広げておく効果があるとされている。時間湯に入っていると、白血球の力が高まり、暑さ寒さにも対応できるようになっ

て風邪が引きにくくなるということも医学的に確認されている。湯揉みは今では「湯揉みショー」として観光資源になっている。

草津温泉の効能は、医学的に次のように確認されている。草津の時間湯は梅毒に効くと言われてきたが、梅毒そのものは駆逐できないが梅毒性の発疹や湿疹には効果があり症状を軽減できた。ハンセン病も菌そのものは死なないが、皮膚の潰瘍が縮小したり治ることはある。水虫や象皮症など皮膚表面に菌や黴がある疾患には効果がある。リウマチも症状をよく見極めて入湯すると効果がある。

3 草津温泉とハンセン病

大谷行部の草津湯治

ハンセン病と湯治ということでは、説経節にある小栗判官が熊野の湯の峰温泉・壺湯に浸かって全快したというエピソードが名高い。世間に疎まれたハンセン病患者が温泉の薬効によって回復する様に病者の願いが込められていると言えよう。特効薬プロミンのなかった時代、ハンセン病患者の回復への願いは、絶望と裏腹に虚構の世界へと託されていた。

草津温泉ではすでに述べてきたようにハンセン病と深い関わりを持ってきた。ここではその関わり方について主なところをみてゆこう（注3-1）。

記録上、もっとも古いのは大谷行部少輔吉継で、文禄3（1594）年のことである。大谷吉継は豊臣秀吉の小姓から出世し越前敦賀城主になったが、ハンセン病に罹り、眼を患った。治癒を祈願して千人斬をしたという噂もあった。最期は関ヶ原の戦いで盲目の身で指揮をとり戦死した。文禄三年に大谷吉継が草津で湯治をしたとき、越後の直江兼統に宛てて書状を出し、そこに眼を患っていることを書いている。戦国期にはハンセン病に効く温泉という評価があったことがわかる。

延宝8（1680）年ごろにできた謡曲「草津」に「氏をばわざと隠す病」「前業の罪によりて現世の病苦を受く」などハンセン病を連想させる詞章がある。

安永9（1780）年には漢学者の平沢旭山が訪れ、『漫遊文草』に次のように記している（注3-2）。

「此の湯癩を治すに名あり、故に四方来聚り殆ど其の穢に堪へず、但し飛瀑川の如くも其の穢を容れず人星を以て厭はず、然れども斯の疾竟に癒えず、亦哀むべからずや但腐爛者は瀑に就きて其の穢を洗ふ。僅に日を延ぶべきのみ。其の深きは頓に命期を促す、是の故毎年此の土に客死する数十名を下らずといふ」

また江戸時代の川柳には次のように詠まれている（注3-3）。

行部さまお入りと草津大騒ぎ（天明3年）

在命で居ても大谷行部なり（安政3年）

筋を引く病大谷切りで絶え（明和8年）

かつたいと棒打ちをする関ヶ原（明和8年）

排除の始まり

草津温泉ではハンセン病患者との混湯が一般的であったが、差別と排除の芽はすでに江戸時代にもあった。正徳4（1784）年、幕府の役人、増井彌五右衛門に出した達書に、

「癩病人湯坪先年は別に之れ有候上処右三人（湯本安兵衛、平兵衛、角右衛門）の者内湯の障りに成り候故潰し候云々」

とあり、ハンセン病患者用の湯を有力大屋の三人が取り壊した事件もあった。天明4（1784）年の松代藩士が書いた『草津湯治』には、ハンセン病患者用の旅舎があったことも記されている（注3-4）。

明治2年、草津を襲った未曾有の大火によって壊滅状態になった草津では、その復興のために湯治客の誘致に奔走した。そのため全国に頒布した「草津温泉誌」に、ハンセン病に効能のあることを書いたので、全国から患者が集まった。明治12年頃には「此の御座の湯は癩病専用に効ありとして、浴者は皆患者なり、囲ひてひとに中を見しめず、全は入りて見るに、浴者皆醜爛を極む、人の見るを惜ふといへば早々に出づ、病患者の旅店は俗に『カソタイボウヤ』と唱へて常の旅店に分てり」と書かれていた（注3-5）。

草津五湯の中でも中心地の湯畑のすぐ上にある御座の湯は、ハンセン病患者用の湯小屋であったが、明治15年に移転し、白旗の湯と改名して一般人用となりハンセン病患者は入れなくなった。

草津温泉に客が増えるにつれてハンセン病患者の姿を嫌う一般客が増えたことや、しかも患者たちも同病者同士であることを好んだこともあって、両者を分けて宿泊させる傾向があったが、それでも混湯や混宿はあった。

しかし明治19年2月、草津村前口村連合役場官選戸長の角田浩平は草津村発展のため「草津改良会」を設け、ハンセン病患者の分離を提案した。そこには「らい患者は必ず湯ノ沢に宿泊せしむるものとし、それ以外の旅人宿には病症の軽重を問わず、断じて宿泊させてはならない」という一条があった（注3-6）。ハンセン病患者排除の始まりである。

湯之沢村開村

こうした流れを受けて明治20年、角田は湯之沢地区への患者の移転命令を出した。湯之沢は

熊笹の生い茂る荒地だったが温泉が湧いていた。そこを無料で貸し出しハンセン病者専用の旅館を建てさせた。患者たちは気苦労なく生活できることから移り住むものが増えていった。

戸数と人口を見ると、明治20年には5戸10名であったが、大正4年には102戸252人になり、大正9年には152戸528人、昭和10年には180戸652名になっている（注3-7）。

当初は患者同士が家族的で同病相憐れみ助け合って生活することができた楽園のようであったが、治療への望みも薄らぐ中で生活も窮乏し、賭博や喧嘩など、次第に荒れた生活を送るものが増えていった。そうしたことや住民の増加によって家屋が本町と接近することなどもあり、湯之沢地区の移転を望む声が熾烈となった。

明治39年には山本與平次町長は町の発展を阻害するのは湯之沢地区であるとして、「らい村移転事業調査委員」を指名し調査を命じた。その結果を明治43年に群馬県知事に提出した。その内容は、町の発展のためには湯之沢地区のハンセン病者を移転するのは現下の急であること、この病気は伝染性であるから隔離した位置に移転させ病毒の散漫を防止し多数の湯治客を安心して滞在させることは焦眉の急であること、無辜の憐れむべき患者たちが花卉栽培や造林園芸ができ娯楽設備を施して余命を全うできるよう社会人道上からも努めるべきで、そのため草津の東南2キロにある滝尻ヶ沢の国有原野に患者を移転させるのがもっとも適当である、というものだった。

栗生楽泉園の創設

湯之沢地区の患者たちは移転に反対し、住民の連判状を以て群馬県知事に嘆願書を提出した。この運動によって急速な移転は阻止できたものの、大正元年に草津町は国から湯之沢部落の移転地として滝尻ヶ沢の国有原野の払い下げを受けるに至った。そして栗生楽泉園の建設へと向かってゆく。

そして光田健輔も、大正四年に内務省に意見書を提出している。それは、「らい村移転は町でやれる程度の問題ではないとして、国費を以て滝尻原に実現をはかるべき」とし「此際此を新たに設定せらるべき療養地区を認め、各種の設備は独り町に委任せず、防疫上の立場より政府に於てせられて、1千人位を移住して差支なき程の温泉量および飲料水を得らるべき様設備を具へられたし」と大規模な施設を提唱している。さらに「従来町の口実は表面美にして常に患者の駆逐策を裏面に蔵することは一度草津の内情に通ずる者の等しく感ずる所にして、町の利害より打算すれば無理ならぬなり」とも言って町民の本音を伝えてもいる（注3-8）。

言うまでもなく光田はハンセン病の病理学研究者であり、隔離政策を推進し断種手術の執行、無癩県運動などハンセン病患者人権を著しく侵害する政策を立案した厚生省の医官である。光田は湯之沢に深く関心を持ち、たびたび意見書を政府に提出していた。そこでは一貫して患者の

隔離を進行している（注 3-9）。

大正 5 年にコンウォール・リーが湯之沢地区に聖バルナバ医院を開設するが、それは後述する。

大正 15 年、第 51 議会に群馬県衛生協会会頭から請願が出された。それは次のようなものだった（注 3-10）。

「草津温泉には全国から慕ってくる、らい患者が湯之沢と称する処に一大部落を形成しているが、この部落は従来の草津町と接近し病毒伝播のうれいあるのみならず地域が狭く年々移入増加する患者は次第に付近に散在する傾向があり、このまま放置するにらい予防上危険なことはいうに及ばず草津町の繁栄をさまたげる。しかるにらい患者は全国各府県から集まる状態なので、すみやかに国費を以て草津温泉を使用しうる一定の地域にらい患者を収容すべき理想的部落を建設せられたいと願うにあり。」

この請願が可決され、湯之沢の移転、国立栗生楽泉園の建設が決まった。昭和 5 年には「草津らい療養地区設費」予算を要求し、翌 6 年に 12 万円の予算で工事に着手した。昭和 7 年に完成前だが外来診療を開始し、2 名を収容した。

楽泉園が開所してからも湯之沢の人口は増えていた。昭和 10 年には 180 戸 652 名になっていたが、楽泉園の入所者は 270 名になり、15 年には湯之沢の人口が 574 名、楽泉園の入所者が 971 名になっていた。

そして昭和 16 年 5 月、聖バルナバ医院が解散し、湯之沢部落も解散となった。楽泉園の入所は 1071 名と、大規模な療養所となった。移転が終了した後も草津町はハンセン患者に理解は深かった（注 3-11）。

聖バルナバ医院とリー母さま

草津におけるハンセン病の歴史を探るときにイギリス人コンウォール・リーを避けて通ることはできない。まずはその事績を見てみよう（注 3-12）。

リーはカンタベリーに豊かな貴族の娘として生まれた。熱心なキリスト教信者で、母と世界旅行をした時に日本の風物が心の奥に刻まれていた。父母の死後、明治 41 年、51 歳の時に日本に渡り、日本聖公会に属し布教しながら日本各地を訪れ、熊本のハンセン病施設や東京近郊の施設を見学している。

大正 4 年、リーは草津を訪れ、湯之沢を視察した。風紀が乱れ医療がなされていない状況を見て、新たな治療施設の開設をすべく湯之沢の森林を購入する。

翌大正 5 年、59 歳のリーは、全財産と生涯をハンセン病者のために捧げる決意で草津を訪れた。雪解けのぬかるみ道をたどって患者の家を訪問し伝道し、死者があるとその汚物を洗い叩



写真2 聖マーガレット館

いの花を飾ったという。

リーはまず一人の少女を救うための「愛の家庭」を旅館の一室を借りうけて作った。若い女性が湯之沢に来ると、遊惰安逸に墮落するのを見たからである。そこに看護師の三上千代が赴任した。それは後に女子ホーム「聖マリア館」となった。さらに後には大正13年に未感染児童のホームである「聖マーガレット館」を作った。

そして大正6年に「聖バルナバ医院」を開設した。そこには医師として後述する服部けさ子が赴任した。設備は貧しく、当面の処置を施すにすぎない程度だったが、医療設備が皆無だった湯之沢地区では患者にとっては光明だった。みずからは質素な生活をし、手厚く訪問看護をし、いたわりながら丁寧に包帯を巻くことから、患者たちは「かあさま」と慕って呼んでいた（注3-13）。

一方で昭和6年に政府による楽泉園の設立が決まったものの、湯之沢地区からの入所者が増えない状況があった。その原因が聖バルナバ医院の存在ではないかと考えた政府は、その閉鎖をもくろんでいた。リーは昭和8年に喜寿のお祝いの後に療養のためイギリスに帰国し、昭和10年にまた草津に戻ったものの、衰えが進み明石に移って療養していた。

聖バルナバ医院は日本聖公会が管理することになり、経営も苦しくなっていった。そして昭和16年5月、医院は解散し、在院者のほとんどは楽泉園に入所した。同年12月18日、リーは明石で亡くなった。遺言により遺骨は聖バルナバ教会の納骨堂に患者の遺骨に囲まれ埋葬された。



写真3 聖バルバナ教会（リーかあさま記念館）

今では聖バルバナ医院の跡は「リーかあさま記念館」となっている。湯之沢の一面が公園になっていて、その木立の中に記念館として保存されている。静かな散策路であるが、そこにハンセン病患者たちの苦悩の歴史を考えあわせるとき、襟元を冷たい風が吹くのを禁じ得ない。

女医・服部けさ子と看護師・三上千代

リーとともに献身的にハンセン病者に尽くした医療関係者に服部けさ子と三上千代がいる（注3-14）。服部けさ子は明治17年福島県須賀川町に生まれた。東京女医学校（現在の東京女子医大）に入学し、駒込キリスト教会で受洗する。信仰心が強くなるとともにひそかにハンセン病患者のために働きた



写真4 コンウォール・リー女史顕彰碑

いと願うようになっていた。医師試験に合格し医師免許を取るも、女医の道が狭かったこともあり看護師として三井慈善病院に入る。そこで看護師の三上千代と出会い、東京の全生園でハンセン病者の看護にあたった。

三上千代は山形県新庄で生まれ、山形高等女学校を卒業後、上京して聖書学院に入学する。三井慈善病院で看護婦の資格を取った。そこで服部と出会う。その後東京の全生園に光田健輔を訪ね、看護婦として勤めた。

大正6年5月に三上が、11月に服部が草津に入り、リーと共に聖バルナバ医院で患者たちの治療や看護に携わった。服部は心臓に持病があったが、枕元に提灯と聴診器を置き真夜中でも往診に応じていたという。しかし二人とリーとは信仰している宗派の違いもあり、患者の隔離と日本人の手による患者の救済が必要と考え、新たな医師が聖バルナバ医院に着任したのを機に、大正13年に鈴蘭病院を作った。その僅か22日後、服部は亡くなった。

服部の死後、三上は東京の全生園に戻ったが再び草津に行き、滝尻原の一面に鈴蘭園という療養施設を運営したが、楽泉園開園を機に閉鎖する。楽泉園は鈴蘭園の後身ともいえるものだった。その後、沖縄や東京のハンセン病療養所に勤め、1978年に亡くなっている。

重監房の悲劇

ハンセン病者のための楽園を作りたい、というのは服部や三上の願いであり、その思いは栗生楽泉園建設への一つの階梯であったかもしれない。だが患者たちの強制隔離がもたらしたものは決して理想的なものだったわけではない。ハンセン病者に対する隔離と排除は患者が望んだものではなく、周囲の差別がもたらしたものだ。そのため入所している患者は抵抗し、時に脱走を試みる。それに対して療養所側はさまざまな手段で阻止しようとする。各地のハンセン病療養所にその痕跡が残されている。

その一つが栗生楽泉園の重監房である。重監房とは何か。まずは楽泉園で配布している重監房資料館のパンフレットから紹介しよう。

『重監房』とは、群馬県草津町にある国立療養所栗生楽泉園の敷地内にかつてあった、ハンセン病患者を対象とした懲罰用の建物で、正式名称を『特別病室』といました。

しかし、『病室』とは名ばかりで、実際には患者への治療は行われず、『患者を重罰に処すための監房』として使用されていました。」

「ハンセン病隔離政策の中で、多くの患者が入所を強制されたこともあり、患者の逃亡や反抗もひんばんにおきました。このため、各ハンセン病療養所には、戦前に監禁所が作られ、『監房』と呼ばれていましたが、この特別病室は、それよりも重い罰を与えたという意味で通称『重監房』と言われています。

重監房は昭和13年(1938年)に建てられ、昭和22年(1947年)まで使われていました。およそ9年間に、特に反抗的とされた延べ93名のハンセン病患者が入室と称して収監され、そのうち23名が亡くなったと言われています。60年以上を経た現在、この建物は基礎部分を残すのみとなっています。監房への収監は各療養所長の判断で行なわれていました。これは、ハンセン病療養所の所長に所内の秩序維持を目的とする『懲戒拘束権』という患者を処罰する権限が与えられていたからです。正式な裁判によるものではなく、収監された患者の人権は完全に無視されていました。」

これらの記述から分かるように、楽泉園をはじめとしたハンセン病の療養所は、患者たちにとっての理想郷ではなく、差別意識に満ちた排除のための隔離施設だったのである。そのことを記録と記憶にとどめ、ハンセン病への差別解消の目的で厚労省によって2014年に楽泉園内に建設されたのが重監房資料館である。

重監房の実態をもう少し見ていこう。この資料館内に復元されている重監房は、たとえ館内が暖房されていても寒々しくなる。高い塀に囲まれ、狭い木戸から入り、何重もの分厚い木の扉から房内に入る。高いところにある小さな窓、薄い布団、狭い配膳口、小さな便所。食事は1日2食で飯と梅干しのみ。壁には暦や文字が刻まれている。周囲には雪をあしらっているが、それが無くても身震いする薄暗い独房だ。真冬には氷点下20度を超えた。

周囲から発掘された遺物も展示されている。錆びた南京錠、メガネ、食器、下駄、手袋など、生活感があるだけに悲劇を伝える度合いが高まっている。さらに重監房に収容された人たちの



写真5 復元された重監房の内部

名前や「罪状」がパネルに展示されている。入所者の証言記録を映像で見るコーナーもある。「楽泉」という名の「地獄」の有様が伝わってくる。まさに日本のアウシュヴィッツと言われる所以である。

現在の楽泉園は、昭和19年度末の患者数1335名をピークとして、その後の治療薬等の開発により、新発生患者は減少し、社会復帰者の増加もあり年々患者数は激減し、平成29年5月1日現在では入所者数は78人となっている。入園者は高齢化が進んでおり、後遺症による身体障害あるいは長期間社会からの隔離などのため、社会復帰は難しいのが現状となっている。

また患者への偏見を背景に、1948年から72年まで、一般の法廷を避けて療養所内で裁判を行なった「特別法廷」が開かれていた「青年会館」を補修し、2019年春から一般公開をすることが決まった（注3-15）。

4 草津温泉と被差別部落

湯の花屋三右衛門とキヨメ役

日本における差別と排除の最も厳しいありようの一つに部落問題がある。関東以北ではその存在はないと思われがちだがそんなことはなく、関東から東北にかけて各所に被差別部落は点在している。草津にも被差別部落があった。

今の群馬県にあたる上野国の被差別部落については中世の鎌倉・室町の時代には史料上見当たらず、戦国末期になって出てくる。大正21（1921）年の内務省の資料では、群馬県の被差別部落数は235で、関東では埼玉県に次ぐ数だ。そして草津については、天和元（1681）年に沼田の真田氏が改易されたときに領分引き渡しのために作成したと思われる文書に、草津町に温泉があり、その湯掃除を勤める長吏に畑高10石4斗3升分を無年貢地として与えている（注4-1）。

ここに出てくる長吏こそ、弾左衛門体制下で有力な地位を占めていた草津の長吏小頭三右衛門である。三右衛門については川元祥一が詳細な考証をしているので、それに依りながらみていこう（注4-2）。

草津温泉には湯の花屋三右衛門と呼ばれたキヨメ役（「穢多」身分）の長吏小頭がいて、温泉の警備や清掃を行っていた。その代償として湯の花を採取販売する権利を持ち、「湯の花屋」という屋号を持っていた。三右衛門は湯之沢に住んでいた。前にハンセン病患者たちを湯之沢に住ませたのは、そこに被差別部落があったからであろう。

江戸時代、関東一円の被差別部落を統括していたのは、浅草に住む弾左衛門で、「穢多頭」または「長吏頭」と呼ばれていた。長吏とは、もともとは寺社の役職名で、清め役をしていた。



写真6 湯之沢地区の入口にある共同浴場「煮川の湯」

神聖な地を清める役職である。しかし同時に穢れを清める、ということから差別され、「穢多」と同じように扱われ被差別民となっていた。そうした長吏の頭だったのが弾左衛門である。

弾左衛門配下には小頭がいた。小頭とは弾左衛門配下にあつて被差別民を支配した長吏の頭で複数の部落を束ねていた者のことである。つまり三右衛門は、弾左衛門の支配に属する長吏の小頭で、いくつかの被差別部落を支配していた存在だった。その出自について『草津温泉誌』には面白いエピソードが載っている（注4-3）。

三右衛門は代々湯根氏を名乗り、人別は長野原になっているが、草津に屋敷を持っていた。その地が湯之沢である。「湯根文書」によれば、長門国の左藤信厚が一族死に絶えたため一人の子を連れて流浪し、養老2（718）年に草津に流れ着いた。笹小屋を建て薬師の下の湯の湧き口に住んだので湯根人と呼ぶようになった。その子孫はそこで栄え、佐藤三右衛門信植の時、源頼朝が草津に来た。

ここで頼朝の開湯伝説と重なってくる。さらに口碑に拠れば、頼朝は滞在中、三右衛門の娘と契り、懐妊した。頼朝は一口の短刀を渡し、男の子ならそれを証拠に鎌倉に訴えてよと言ひ残した。娘は男子を生み、頼朝に知らせると喜んで、頼団左衛門源一胤と名乗らせ、草津の見回り役とさせ湯の花の権利を与えた、という。

この頼団左衛門という名はいろいろのことを考えさせる。「頼」は「らい」に通じるし、「団左衛門」は「弾左衛門」に通じる。もちろん口碑で、しかも偽家系譚なのでこじつけであるが、三右衛門が湯の花の権利を獲得した経緯の正当化であろう。

湯根氏は、湯の花の採取権を持つと同時に、湯小屋の清掃、旅行病者の始末、「乞食」の取締り、夜警なども役として行っていた。いくなればそれらの役に対する手当てが湯の花採取権であったとも言えるのである。もちろん差別される身分ではあったが。

三右衛門が役の代償として湯の花の採取権を持っていることについては、次のような史料がある。これは天保10（1839）年に湯の花の小売りを願い出たときの文書である。（注4-4）。

「私は古来から温泉場の掃除、其他夜番、悪党共の取締を命ぜられ村の旦那、御役人衆へ御用を勤めさせて貰っています。その給分として草津温泉が涌き初め以来、滝の湯の上、垣の中から、春冬の土産の湯花を貰い受け、古来から稼業にしております。」

この資料の後半には、「古来より当温泉場掃除・夜番の給金としての、湯の花より外に収入はなく」という記述もある。温泉の清め役や治安維持の警備役の代償として、湯の花の採取権を持っていたことがわかる。被差別民が担っていた社会的役割を良く示す例であろう。

湯の花の権益

では湯の花の権益とはどのようなものだったのか。戦国時代から火薬の原料として硫黄は貴重な資源であった。鉄砲伝来以来、甲斐の武田氏に草津の湯本氏は硫黄を献上しており、江戸幕府にも献上している。草津一帯でも万座など白根火山の周囲に硫黄採掘が盛んであった。ただし硫黄の採掘は温泉への悪影響や農作物への災いを恐れ、たびたび禁止されている。

湯の花は硫黄とは違い、湯坪の底や湯を引いた樋に沈殿したものをこそぎ取るものだ。江戸時代でも薬用の入浴剤として人気があった。その権利を三右衛門が持っていた。『湯本平兵衛家文書』に次のようにある（注4-5）。

「硫黄とハ格別相違、御当地薬種屋江売渡、右湯之花之儀、御支配御郡、長野原町人別ニ相詰居候、草津村居屋敷所持仕候、穢多三右衛門と申者、前々より取来六ヶ所温泉之内、滝湯斗ニ湯之花ヲ取、年中穢多営業方ニ仕候、凡金高五拾両程有之候由」

これは安永10（1781）年、江戸時代中期の文書である。これによれば湯之花は硫黄とは別物で江戸へ売り渡していた。長野原に人別があり草津に屋敷を持つ三右衛門が、以前から6か所ある湯のうち滝湯から湯之花をとり、年間50両の売り上げだったという。

しかし次第に湯の花採取に割り込む人が出たり、戸主の病気に抛る困窮などから三右衛門も他人に採取権を譲渡したりして、湯の花の権利を独占的に維持することができなくなっていった。湯の花をとる作業そのものは簡単なので、新たな採取場などが見つければ、採取権を主張しきれないこともあったのだろう。権利が一般人の手に移ってからは販路が広まったという。今では草津町の温泉協会が採取している（注4-6）。

明治2年の大火で草津は壊滅状態になり、湯之沢にあった三右衛門の屋敷も焼けたことだろ

う。次に史料に出てくるのは明治16年、長野原在住の湯根三五郎（三右衛門）が滝下と湯之沢の土地を売ったという記録がある。この時期は草津温泉の復興過程で、温泉場の拡大と同時に増えてきたハンセン病者を湯之沢に隔離しようという動きがあった。それに関連する事業と考えられる。三右衛門自身は草津を離れ、かつて人別の置かれていた本拠の長野原に移っていたと思われる。

おあまり小屋と骨が原

三右衛門の屋敷の近くには「おあまり小屋」と呼ばれる小屋があり、宿代の払えなくなった人たちが集まって来ていた。湯之沢の先には「骨が原」と呼ばれる谷があった。「乞食小屋」とも言われた「おあまり小屋」の管理は三右衛門が行っていた（注4-7）。

ここでいう「おあまり」とは食べ残しのことだ。その名は、文無しになったハンセン病患者たちが、集団になって朝夕に旅館街の前を歩き、「おあまり、おあまり」と言いながら食べ残しをもらい集めたことによるという。

『風雪の紋』には『草津繁盛期』（1865年）の記述として「表の道を50人、60人の乞食が朝夕昼の飯が終わった時分に、一列に並んで練り歩く」とあるが、このエピソードは悲しい。身体が崩れてきたハンセン病患者や食い詰めた人たちが、ボロをまとって練り歩いたのだろうが、その人たちを管理するのもまた三右衛門の役であった（注4-8）。

『風雪の紋』によれば、草津温泉は冬の間閉鎖され、患者が草津を下る際、病気が進行していたり仕送りが無いものは、息のあるものでも骨ヶ原に捨てさせた。骨ヶ原は行き倒れになった人を捨てたと言われるところで、人骨がたくさん出てくる。その処理は三右衛門の役で、実は死者だけでなく、生きていた人の始末もしたのではないかと川元は想像している。おそらくそうであろう。

明治になって、湯之沢の土地を三右衛門が売った後に骨が原でハンセン病者の施設を造成しようとした際、たくさんの人骨と共に一つの供養塔が発見された。そこには文化13（1816）年の日付で、「南無阿弥陀仏」と「施主 湯花屋三右衛門」と刻まれていた。『風雪の紋』では「湯の花採りの権利をまもるためとはいえ、病者の死骸を犬猫のそれと同然に処理し続けた場所へ、せめてもの慰めにと供養塔を建てた、そう考えていいのではないだろうか」と論述している（注4-9）。

被差別部落の役として死穢に関わることは多い。それは誰かがやらなくてはならないことだし、社会的な意義もあることだ。しかし息のある人間を捨てざるを得なかったとしたら、そのときにはどのような思いが胸に去来していたのだろうか。

5 草津良いとこ一度はおいで

近代の負の遺産

ハンセン病者に対する差別と排除は長い歴史を持っている。しかし草津温泉に限って言えば、本格的に排除が始まったのは明治になってからである。もちろん江戸時代には、大屋が内湯を作って共同浴場での混湯をしなくてよくした例もある。だがそれはハンセン病への差別と言うよりは高級旅館の特権的な利用のためと言える。

日本では、プロミンによってハンセン病が治療できるようになってから排除が強くなっていった。療養所での不妊手術や監禁、暴行などひどい人権蹂躪があった。近代国家としての日本が、生産力第一主義のもとに人間の多様性を尊重する社会から遠くなってしまったのだ。

いまあらためて多様性を尊重し、個人の人間性を活かし、すべての人が幸福に生きる時代に向けて社会を再構築しなくてはならない。現在のような人権意識がなかった時代であるにもかかわらず、ハンセン病者と健常者が同じ宿に泊まって同じ温泉に浸かっていたかつての草津温泉の姿を見つめ直したい。またそうしたところにも存在し、社会に必要な役割を果たしながらも悲しい役も引き受けていた被差別部落の人たちがいた。

さまざまな価値観の共存を実現してきた草津というトポス。多々問題があったにせよ、積極的に評価することも大事なポイントである。武田徹は次のように言っている（注 5-1）。

「草津を訪ねて感じるのは、そこが差異を内包する共同体になっているということだ。療養所とその周囲を含めて草津という地区を一つのマイクロコスモスとみなせば、そこでは（元）患者という差異が、すっかりその内部に溶け込んでいる。楽泉園という療養所内部にかぎってもトロチェフのように数奇な運命をたどった人物、しかも日本では珍しいギリシャ正教の熱心な信者まで含めて共同体が形成されている。複数の価値観が共存しえているところはノージックの「最小国家」を彷彿とさせる。（中略）生の多様性を「生きがい」云々の概念で安易に一括りにするのではなく、その個性を尊重すべき前提とした上で緩やかにつなぎ合わせ、共存させている場所——、そんな療養所は、まさに「都市」と呼ばれるのに相応しい。そして差異ある人たちが差異を互いに尊重しあい、弱者を助けて行こうとする利害調整のシステムを有しているという点でも、そこはまさに「都市共同体」なのである。」

療養所の元患者は高齢化が進み、いずれハンセン病の療養所という施設ではなくなる。しかしこの温泉町に他者への優しさがもたらされたのだとしたら、時代に継ぐべき重要なメッセージをここから汲み取ることができるだろう。共存から排除へ、そして再び共存を目指している草津温泉に学ぶことは多い。「草津良いとこ一度はおいで」という言葉の意味をかみしめたい。

注

- (1-1) 古典的な人種概念は、分子生物学の研究によりすでに破綻している。遺伝子的には「白人」「黒人」「黄色人」も全く同じで、生存してきた環境の違いによるものである。尾本恵一『ヒトと文明』ちくま書房、2016年。
- (1-2) たとえば2003年11月に熊本県阿蘇郡南小国町のホテルがハンセン病元患者の宿泊を拒否した事件がある
- (2-1) 萩原進「中世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年
- (2-2) 萩原進「中世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年、関戸明子『草津温泉の社会史』青弓社、2018年
- (2-3) 尾崎喜佐雄「古代の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年
- (2-4) 萩原進「中世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年
- (2-5) 萩原進「中世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年
- (2-6) 山本順次「草津温泉観光発達史」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (2-7) 川合勇太郎「近世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年
- (2-8) 山本順次「草津温泉観光発達史」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (2-9) 山本順次「草津温泉観光発達史」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (2-10) 山本順次「草津温泉観光発達史」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (2-11) 萩原進「中世の草津」『草津温泉誌』第壹巻、草津町役場、1984年、関戸明子『草津温泉の社会史』青弓社、2018年
- (2-12) 関戸明子『草津温泉の社会史』青弓社、2018年
- (2-13) 草津温泉の特徴や効能については、小嶋碩夫「物療医学からみた草津温泉」、三浦彦次郎「草津温泉の湧出量」『草津温泉誌』自然・科学編Ⅰ、草津町役場、1984年
- (3-1) 以下、草津とハンセン病とのかかわりの歴史は、栗生楽泉園患者自治会編・発行『風雪の紋』1982年、加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年、小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年、による。
- (3-2) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-3) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-4) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-5) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-6) 小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年
- (3-7) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年、小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年
- (3-8) 小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年
- (3-9) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-10) 加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年
- (3-11) 小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年
- (3-12) リーについては、加藤三郎・山本与志朗「湯之沢地区及び栗生楽泉園」『草津温泉誌』第貳巻、草津町役場、1993年、小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年、による。

- (3-13) 直接リーの世話を受けた松島よし江が、親しみを込めて証言している。日本聖公会日韓協働委員会編『草津のタルピッ 〈月あかり〉』聖公会出版、1994年
- (3-14) 小林茂信「ハンセン氏病と草津温泉」『草津温泉誌 自然・科学編』草津町役場、1984年
- (3-15) 『東京新聞』2019年2月3日。同紙5月8日夕刊によれば、園長が看守に逃亡防止を指示した文書が発見された。
- (4-1) 大熊哲雄「関東」『東日本の部落史』I、東日本部落解放研究所編、現代書館、2017年。
- (4-2) 川元祥一「部落の文化と歴史 草津温泉」1～4、『部落解放』2011年1月～4月号。
- (4-3) 川合勇太郎「近世の草津」『草津温泉誌』第壱巻、草津町役場、1984年
- (4-4) 川合勇太郎「近世の草津」『草津温泉誌』第壱巻、草津町役場、1984年。川合勇太郎による現代語訳。
- (4-5) 川合勇太郎「近世の草津」『草津温泉誌』第壱巻、草津町役場、1984年
- (4-6) 川元祥一「部落の文化と歴史 草津温泉」2、『部落解放』2011年2月号。
- (4-7) 川元祥一「部落の文化と歴史 草津温泉」3、『部落解放』2011年3月号。
- (4-8) 栗生楽泉園患者自治会編・発行『風雪の紋』1982年
- (4-9) 栗生楽泉園患者自治会編・発行『風雪の紋』1982年
- (5-1) 武田徹『「隔離」という病い』講談社、1997年。

*写真は筆者撮影

日本の《発見》——西欧人／日本人による《旅行》と 明治・大正期のガイドブック ～ポール・クローデルの目に映った 1898年と1920年代の間の日本を例として

根岸 徹郎

1. はじめに

幕末から明治、大正期にかけて西欧諸国から日本を訪れた外国人は、各地でのさまざまな体験を経てそれぞれが異なった反応を示し、また個々の立場から自らの見解を書き残している。彼らが行った多くの《発見》と《解釈》は個人的なレベルを越え、訪問者の背後にある文化的な見方を反映したものとして興味深い。1920年代に駐日フランス大使として東京に滞在したポール・クローデル (Paul Claudel, 1868-1955) は、フランスのことについて語って欲しいという依頼に対して、1922年(大正11年)の夏に日光で行った講演¹でこう述べている。

自分の国について語るの、自分自身について語るのとほとんど同じようにむずかしいものです。われわれが自分自身について描いてみるイメージと、わざわざわれわれを見に来られた方々の新鮮で真心のこもった目に映る私たちの姿の間には隔たりがあります。この隔たりのもつ面白さは、旅行者たちが書きたいいろいろな本の中で十分味わうことができます。

確かにこうした旅行者たちを素朴すぎるとか悪意があるといって非難するのは容易です。けれども、間違っているのはいつも彼らの方で、われわれのみが自分自身の反駁の余地のない証人であるというのは本当に確かなことでしょうか。実のところ、人はたいてい自分が今何をやっているか知らないまま行動しています。直ちに人に説明することができるような合理的で明瞭な動機によってではなく、人が動くのは習慣によってであり、そのときの状況や義務や欲求のうながしに応じて本能的、即興的に反応することによってなのです。

[……] われわれにとっては全く必然的で当然のこのように思われるあれこれの仕草や存在様式や精神の態度、これらが実は逆にもっている特徴や特殊性や、しばしばそこにあ

¹ 早稲田大学教授の五来欣造の依頼による。五来はクローデルが自分の座右の書であると語るミシェル・ルヴォン (Michel Revon, 1867-1947) の『日本文学選』(Anthologie de la littérature japonaise, 1910) の編集の協力者だった。

るユニークさを見分けることができるのは外国人だけなのです²。

たしかに、「外」からの視線こそが「内」に留まっていたのでは見えてこない新鮮な驚きを提供してくれるというクローデルのこの指摘は、わたしたちにもよく理解できるものだろう。それではこうした「外」の視線に対して、「内」の目はどのようにそれを受け止め、あるいは応答してきたのだろうか？ 外国人の視点や発想から生まれたスタイルがそれまで日本人が見てこなかった部分に光を当て、そのまま日本に根付いていったケースもまたいろいろな領域で見られることは、さまざまな例が示してくれている。わたしたちの生活において、今日では当たり前のようにになっているものの起源に欧米からの見方が投影されているケースは、実際、数多く見出せるはずである。

こうした問題設定から出発して、本稿ではとくに旅行、観光という分野に注目した上で、そこに情報提供源としての《ガイドブック》と先行としての《保養地》というテーマを立て、明治期から大正にかけてのそれらの変遷を追うことで、西欧と日本との文化的視線の交差について考察を試みたい。

2. クローデルと日本

最初に引用したポール・クローデルは、大正末の日本で「詩人大使」という愛称で親しまれた文人外交官で、富田溪仙（1879-1936）や竹内栖鳳（1864-1942）らの京都画壇の画家との交流や、能や文楽といった日本の伝統演劇に深い理解を示し、そこから豊かなインスピレーションを汲みとったフランスの詩人、劇作家として知られる。1921年（大正10年）秋から1927年（昭和2年）冬までの足かけ7年におよぶその任期中に、この詩人大使は日本各地を精力的に訪問している。その主な旅程を記すと、以下のようになる。

1921年（大正10年） 9月2日フランスのマルセイユ発／同月29日フランス領インドシナのサイゴン（現ホーチミン市）到着 フェエ等を経由して10月24日にハノイ着 11月7日ハノイ発／11月18日神戸港着／19日横浜港到着／20日東京の在日フランス大使館に着任

1922年（大正11年） 1月～2月摂政皇太子裕仁訪仏の答礼使として来日したジョッフル元帥に随行して京都、大阪、神戸ほかを歴訪／4月大宮散策／4月箱根、熱海、小田原、

² ポール・クローデル『朝日の中の黒い鳥』（内藤高訳）、講談社学術文庫、1988、p. 13-15.

鎌倉、江の島／5月関西訪問（京都、大阪、神戸）、京都帝国大学等で講演会／8月三浦半島探訪／夏、中禅寺に長期滞在／10月南足柄（最乗寺）訪問／10月日光および中禅寺訪問／11月宮ノ下散策／12月高尾山散策

1923年（大正12年） 1月成田山新勝寺訪問、日光訪問／4月京都、奈良訪問／5月中禅寺滞在／7月中禅寺滞在／7月千葉をドライブ／9月1日関東大震災罹災（東京一横浜一逗子を徒歩で移動）10月中禅寺滞在、湯元に行く／11月～12月大阪、京都、名古屋、静岡を廻る（東海地方では名古屋離宮、久能山等を訪問）

1924年（大正13年） 3月小田原、水戸、沼津、三津滞在 4月宮ノ下滞在 5月来日したインドシナ総督メルランに随行して京都、大阪、神戸、宮島、釜山を歴訪 7月富士登山 7月～8月中禅寺、湯元滞在 8月仙台、松島訪問 10月伊香保滞在 11月富士五湖散策 11月九州視察旅行 長崎、福岡、大牟田、雲仙、熊本、鹿児島、別府を歴訪

1925年（大正14年） 1月京都、大阪訪問 1月一年間の恩賜休暇を得て、フランス領インドシナ経由でフランスに一時帰国

1926年（大正15年／昭和元年） 2月日本帰任 3月高尾山散策 4月熱海滞在 4月～5月日本に寄港した軍艦ジュール・ミシュレ号で宮島を訪問、帰路に神戸、大阪、奈良、伊勢、名古屋を訪問／5月日光、中禅寺滞在／6月日光訪問／6月大宮散策／6月葉山滞在／7月京都訪問／7月中禅寺、湯元滞在／8月日光訪問、男体山に登山、また沼田を抜けて伊香保、軽井沢、前橋経由で日光に戻る／9月中禅寺滞在 軍艦マルヌ号に乗船して伊豆下田から神戸、岡山、屋島、高松、尾道、宮島、別府、宇佐、耶馬溪、湯布院等を廻り、帰路に神戸、大阪に寄る／10月秩父散策／10月日光、中禅寺滞在／12月関西（京都と大阪）を訪問し、関西日仏学院設立の準備と離日の挨拶をする

1927年（昭和2年） 1月箱根宮ノ下滞在／2月7日大正天皇の大喪儀に出席の後、2月17日にワシントンに向けて離日

このように並べてみると、詩人大使が訪れた場所は、北は仙台から南は鹿児島まで広範囲にわたっているが、一方で北海道、沖縄と日本海側には足を踏み入れていないことがわかる。その理由は明確ではないが、日本の伝統的文化に関心を持っていたクローデルにとっては、関西圏から九州にかけての地域³の方により目が向けられていたとしても不思議ではない。また、外交官として鉄道や航空機などの販路を広げる任務から、重工業の発達した太平洋側の方に訪

³ 九州を訪問した際に、地元の新報のインタビューに応じてクローデルは、日本建国の神話発祥の地を訪問できてうれしいと語っている。大出敦・根岸徹郎「P・クローデルの九州旅行」、『青山フランス文学・語学研究』復刊12号、2003、p.186を参照のこと。

問の力点を置く必要があったことも、容易に想像ができる。さらに、当時の東京からの交通手段の利便性も、こうした偏りを生んだ原因のひとつとして考えられるだろう。

これらの旅行、各地への訪問の中でもジョッフル元帥やメルラン仏領インドシナ総督に随行したものは明らかに公務であり、それに伴う職務上の義務や制約等もあったと思われる。また京都と大阪、神戸に関しては、稲畑勝太郎たち関西財界人とのコンタクトや関西日仏学館設立に向けての連絡といった目的を持ったものが、重要な部分を占めていたと考えられる。とはいえ、こうした機会を上手に捉えて、クローデルは政府要人といっしょに宮島や四国を巡っている。

また、1924年（大正13年）秋の九州訪問では、最後に鹿児島から別府に鉄道で向かっている。これは開通したばかりの日豊本線を視察することがひとつの目的だったが、到着した別府では市長の案内の下で「地獄めぐり」を楽しんでいる。クローデルは当時としては格別に温泉を好んだ西洋人のひとりであり⁴、別府には1926年（大正15年）にも再訪し、そのときには当時、積極的な温泉経営を行っていた油屋熊八の「亀の井ホテル」に泊まり、「別府に／われ再び訪れん／温かきいで湯と／温かきもてなしに／わがいのち甦る／温かきいで湯／なごやけき人の心／われ再び別府に／来らむ 1926年9月25日」*« À m. Kumahachi Aburaya / Je reviendrai à Beppu / pour me plonger dans les eaux chaudes et vivifiantes de l'hospitalité japonaise / P. Claudel / 25 sept. 1926 »*という詩を贈っている⁵。

その一方で、関西訪問では宮島綱男⁶や喜多虎之助⁷といった知人、富田溪仙や竹内栖鳳らの京都在住の画家たちとの交流を目的とするものも多くあり、溪仙の嵐山のアトリエでは数時間も過ごすなど、日本の文化に深く親しむ機会を得ていた。

こうしてさまざまな地を訪問したなかでも、東京近郊に足を運んだものには、プライベートな楽しみの色合い濃いものも数多くあったと推測される。クローデルは大使館別邸のある中禅寺湖畔を深く愛したことで知られるが、たしかにこの中禅寺・日光と箱根宮ノ下への訪問はかなり頻繁かつ定期的であり、これが詩人大使にとって一種の保養目的であったことは、おのずと窺い知ることができるだろう。とくに中禅寺湖畔は詩人クローデルにとっては靈感を授かる場であり、この地で「水の上に水のひびき 葉のうへにさらに葉のかげ (Bruit de l'eau sur de

⁴ 別府のほか、伊香保などにも足を運び、日光の湯元、箱根の宮ノ下では何度も温泉を楽しんでいる。

⁵ 現在、別府の北浜公園には「別府を讃う」として、この詩碑が立っている。

⁶ 関西大学で教授職にあった経済学者で、文楽に関する造詣が深いことも知られていた。クローデルに文楽を紹介したのはこの宮島で、後に詩人大使は「宮島教授への手紙」*« Lettre au professeur Miyajima », 1926* というエッセイを書いている。

⁷ 喜多虎之助は当時、京都で外国人を客としていた古美術商で、クローデルは彼の案内でたびたび京都を散策している。

l'eau ombre d'une feuille sur une autre feuille)』⁸ (山内義雄訳) といった優れた短詩が、いくつも生み出されている。

日光、とりわけ中禅寺湖畔が外国人にとっていかに魅力的な場所だったかについては、井戸桂子の『碧い眼に映った日光』(2015) に詳しい。それによると、先鞭をつけたのは後述するイギリスの外交官アーネスト・サトウ (Ernest Satow, 1843-1920) であり、彼が 1875 年 (明治 8 年) に『日光ガイドブック』(*A Guide Book to Nikkō*) を出したことが、その出発点となっている。これは「42 ページというささやかな英文のガイドブックであるが、日本で発行された英文のガイドブックとしては、明治 6 (1873) 年の京都、明治 7 (1874) 年の横浜に続く、3 冊目」⁹ のものだった。こうした記述からも分かるように、日光はかなり初期の時期から外国人を惹きつけた場所で、1872 年 (明治 4 年) に鈴木ホテルが、さらにジェームズ・カーティス・ヘップバーン (James Curtis Hepburn, 1815-1911、日本での通称はヘボン) の薦めで金谷カッテージ・イン¹⁰ が 1873 年 (明治 5 年) に営業を始めている¹¹。

こうしてみると、外交官としての公務、あるいは個人の楽しみ、保養のためのいずれにしても、クローデルが日本を縦横に移動し、各地の風物を存分に楽しんでいることは間違いない。そしてそれは、こうしたクローデルの移動を支え、また滞在を可能にするだけの施設が、大正末の時期にはすでに日本全国に備わっていたことの証でもある。

移動に関しては、たとえば、東京と京都、大阪の間にはクローデルはしばしば夜行列車を用いているが、ほぼ一晩で目的地に到着していることが『日記』の記載などでわかる。列車での移動の場合、外交官用の特別仕立てのものを使うことは稀¹² で、一般車両に他の日本人といっしょに乗車するケースがほとんどだった。そうした折には、たとえば日光から仙台に向かう列車の中では、車中で弁当を食べる紳士然とした男や、人前で服を素早く替着替える女の姿に注意を向け、印象を『日記』に書き留めているが¹³、そこからは鉄道を利用した人々の移動がきわめて日常的なものになってきている状況を窺い知ることができるだろう。また、ときには自動車による移動も加わり、日光や中禅寺に行くためには列車で行くか、あるいは車を使う場合があった。

一方宿泊施設については、クローデルは西洋式のホテルに泊まることが基本で、東京では帝

⁸ Paul Claudel, *Œuvres poétiques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1967, p. 738.

⁹ 井戸桂子『碧い眼に映った日光』、下野新聞社、2015、p. 19.

¹⁰ 現在の金谷ホテル。金谷ホテルの歴史については、井戸桂子の上掲書および富田昭次『ホテルと日本近代』、青弓社、2003 などに詳しい。

¹¹ 井戸桂子、上掲書、第一章「日光と外国人」および第七章「滞在先」を参照のこと。

¹² 九州旅行の際には、北九州では特別の列車が準備されたと思われる。大出敦・根岸徹郎、前掲書、p.184 を参照のこと。

¹³ Paul Claudel, *Journal I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, p. 639.

国ホテル、関西では京都の都ホテルや大阪の大阪ホテル、箱根宮ノ下は富士屋ホテル、そして日光では中禅寺湖畔の大使館別邸を除けば金谷ホテルを常宿としていた。1924年に九州を訪問した際には、福岡では一番格式の高い日本旅館（栄屋旅館。現存せず）に宿泊したものの、息子に宛てた手紙では布団そのほかに不満をもらしているが、基本的には西洋スタイルの宿舎がほとんどの場合に準備されていて¹⁴、これらの地では外国人を受け入れるだけの施設がすでに十分に整っていたという状況をうかがい知ることができる。

こうしたクローデルの行動から透けて見えてくるのは、列車による移動、ホテルや旅館といった宿泊施設を利用して都市や保養地に滞在することが、1920年代初めには広く日本全体に行き渡っていたという事実である。次章で詳しく取り上げるアーネスト・サトウが1884年（明治16年）に出したガイドブックを読むと、この時点では外国人の日本国内の旅行はまだ完全に自由ではなく、「遊歩規程を越えて日本内地を旅行するためには、日本の政府機関が発行する内国旅券を取得しなければならない」状況であり、移動手段としては人力車が紹介され、道の整備はまだ不十分で、京都と宮ノ下を除けば宿は西欧風のもものがほとんどなく、食事に関しては「内陸部のほとんどの地域では旅行者は外国風の食事をするのは実際上不可能であり、現地の食物を摂れない人は自分用の糧食を持参しなければならない」¹⁵と説明されている。

それでは、このような不自由で悪条件だった初期の旅行状況から、大正期にクローデルが享受した快適さに至るまでの道のりはどういったものだったのだろうか？ また、そこでは日本にきた外国人たちが、どういった役割を果たしていたのだろうか？

3. 外国人による外国人のためのガイドブック——E. サトウとB. H. チェンバレンの『日本旅行案内』から『ケリーの日本帝国案内』へ～外国人が見たいものの紹介

クローデルが最初に日本を訪れたのは、フランス大使として東京に着任する1921年（大正10年）を20年以上遡る、1898年（明治31年）のことだった。これは先のサトウのガイドブックの最初の刊行とクローデルが大使として日本に赴任した時期の中間にあたる。このとき、若きクローデルは領事として上海に勤務中だったが、5月から6月にかけてのおよそ一か月にわたって日本に滞在し、各地を精力的に廻っている。オーギュスト・ロダン（Auguste Rodin, 1840-1917）の弟子で天才的な彫刻家だった姉カミーユ（Camille Claudel, 1864-1943）の影響で、若いころから北斎漫画等に親しんでいたクローデルの日本に向けられた関心はきわめて高く、

¹⁴ 九州では、長崎ではジャパンホテル（現存せず）、雲仙は九州ホテル、大牟田は三井山ノ上倶楽部（現存せず）といった欧米人向けの宿泊施設に泊っている。大出敦・根岸徹郎、前掲書を参照のこと。

¹⁵ アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』上巻、カルチャー編、（庄田元男訳）、平凡社、1996、p. 20-28.

後に「優れた芸術家だった姉は、日本に対して限らない賛嘆の念を抱いていた。そこでわたしも日本の版画や書物をいろいろと見ていたし、この国に強く惹かれるようになった」¹⁶と語っている。このように若いころからの憧憬の地だった日本へのはじめての旅行は、以下のような旅程だった。

1898年（明治31年）5月27日上海より長崎に到着／瀬戸内海経由で28日神戸到着／30日に横浜到着／6月1日東京を経由して日光に向かう／6月2日から3日にかけて日光／4日中禅寺に向かうが豪雨で引き返す／5日東京に戻る／6日東京を散策／7日横浜／8日国府津に向かい、箱根湯本、宮ノ下を経由して元箱根／9日熱海で入浴、横浜に戻る／11日東京散策、芝の増上寺、上野の美術館、浅草などを見学した後、横浜に戻る／12日江の島／13日御殿場経由で静岡／14日静岡で臨濟寺と浅間神社を訪問／15日に夜行列車で朝、京都到着。御所、北野天満宮、大徳寺、金閣寺訪問、也阿弥ホテル¹⁷ 宿泊／16日二条城、泉湧寺、金戒光明寺、銀閣寺、南禅寺訪問／17日神戸到着、明石の松林を散策／18日神戸を船で発って翌19日に長崎到着／20日長崎散策と海水浴／21日に長崎を出発して上海への帰路に就く¹⁸

日光では雨の中を中禅寺に向かうものの途中で引き返しているが、このときにクローデルは詩人として重要な啓示を受けている。この意味で彼にとっての日光・中禅寺体験はきわめて深い刻印を刻むものとなったが¹⁹、そうした文学的逸話はともかくとして、クローデルが日本で辿った道は今日の目からすれば、はじめてこの国を訪問した外国人の旅程としては一風変わったものであるように見える。領事館のあった長崎、神戸、横浜、公使館²⁰が置かれていた東京は外交官として当然の訪問地であり、また、半世紀前までは天皇がいて日本の政治、文化のもうひとつの中心だった京都への関心は自然なものだったとして、それ以外の日光、中禅寺湖、国府津、静岡、江の島といった訪問場所の選択基準を、若き日のクローデルはどこから得ていたのだろうか？

もちろん、東京や横浜在住のフランス人から情報を仕入れたであろうことは容易に想像がつくし、日光・中禅寺はこの時点ですでに外国人の避暑などに人気の地だった。だが同時に注目

¹⁶ Paul Claudel, *Mémoire improvisé*, Gallimard, 2001, p. 135-136.

¹⁷ 1879年に京都の円山公園内に開業した也阿弥ホテルは、当時、外国人を受け入れた京都を代表するホテルで、ピエール・ロティも宿泊した。富田昭次『ホテルと日本近代』、p. 96-98を参照のこと。

¹⁸ 中條忍監修『日本におけるポール・クローデル』、クレス出版、2010、p. 11-16を参照のこと。

¹⁹ 『詩法 (*L'Art poétique*, 1907)』と「散策者 (*Promeneur*», 1898)」で語られているエピソードである。

²⁰ この時点ではまだ大使は置かれず、フランス政府の代表者は公使だった。公使館が大使館に昇格するのは、1911年の日仏通商航海条約改正以降のことである。

されるのが、彼がこの日本訪問の際に携えていたガイドブックである。それはバジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) によるマレー社 (John Murray) の『日本旅行案内書』(*A Handbook for Travelers in Japan*) で、この当時、日本を訪れる外国人にとっては必携ともいえる本だった。そして、クローデルはこのガイドブックの記述にかなり忠実に沿って行動していると考えられるのである。

クローデルがこの本を参照していたということは、例えば彼の散文詩「そこここに」(*Ça et là*, 1898) の中で、京都の三十三間堂の由来に関わる記述が²¹、明らかにチェンバレンの故事紹介を下敷きにしていることから推定される²²。さらにクローデルの旅程に関しても、「こう考えて、クローデルの文章と『手引き』の説明とをクローデルの旅程を追って読みくらべると、彼がきわめて忠実にこの案内の指示に従っていることが明らかとなる。そもそも五月二十八日に長崎に着き、海路横浜へ向かい、東京へ着くや、ただちに、六月一日にはすでに日光にいるというのも、『手引き』が教えている六月一日と二日の東照宮の祭礼を見物するためだったのである」²³と渡邊守章は指摘している。

マレー社は当時、世界各国のガイド本を出版して名声を博していたイギリスの出版社だった。クローデルが携えていたのは1894年(明治27年)刊行の『日本旅行案内』の第4版で、編著者は上述のようにB. H. チェンバレン(W. B. メーソンとの共同執筆による)だった。1873年(明治6年)にいわゆるお雇い外国人として来日したチェンバレンは東京帝国大学等で教鞭を取りながら、日本についての著作(『日本事物誌』*Things Japanese*, 1890)の執筆や『古事記』の翻訳(*Ko-Ji-Ki, Records of ancient Matters*, 1882)などを行った、明治期の代表的な日本研究者のひとりだった。1911年(明治44年)まで日本に留まった彼は、アカデミックな仕事をこなすかわらで、日本旅行のためのガイドの執筆にも強い関心と意欲を燃やしていたという²⁴。

ただし、チェンバレンが編著者として関わったのはクローデルが持っていたこのガイドブックの1891年版(第3版)からで、もともとこの本の初版はアーネスト・サトウによって書かれたものだった²⁵。『一外交官の見た明治維新』(*A diplomat in Japan*, 1921)などの著作で知られるサトウは、1862年から1883年と1895年から1900年公使時代の二度にわたって日本

²¹ 後白河法皇の頭痛(クローデルは歯痛としている)に関するエピソード。

²² 渡邊守章『ポール・クローデル 劇的想像力の世界』、中央公論社、1975、p. 470を参照のこと。

²³ 上掲書、p. 470。

²⁴ ラフガディオ・ハーン宛の手紙でチェンバレンは、「旅行案内書の制作は、人生の最も大きな喜び」と語っている、『外国人が見た日本』で紹介されている。内田宗治、前掲書、p. 19。

²⁵ ただし、チェンバレンも協力者のひとりとして最初の版からこのガイドブックに関わっている。詳細はアーネスト・メイスン・サトウ『明治日本旅行案内』(下)(平凡社、1996)の庄田元男による「訳者解説」を参照のこと。

に滞在したイギリスきっての日本の事情に通じた外交官であると同時に、自分の足で日本中を歩いて訪ねた旅行家でもあった²⁶。「日本アルプス」という今日では定着した呼び名を最初に活字化して用いたのはこのサトウであるというが²⁷、彼自身も富士山、越中から飛騨、そして修験道の聖地である吉野といった峻厳な山々を自らの足で踏破している。

サトウは1881年(明治14年)に横浜のケリー商会から最初の旅行案内『中部北部日本旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*)を刊行するが、彼は「当初からロンドンのジョン・マレー社から出版するようにと念願していた。マレー社は、西欧社会において世界の各主要国ごとの旅行案内を出版し、多くの人々から好評を得ていた。[……]一八八〇年頃のサトウ文書を読んでみると、彼はかなり以前から将来マレー社版『日本旅行案内』に結実するであろう高度な知識水準を持ち、かつ実用的なガイドブックの作成を心掛けていたことがわかる。そのような目標を心に秘めながら、サトウは日本国内の旅を続けている」²⁸と、庄田元男は指摘している。

サトウの念願が叶って、1884年(明治17年)の第2版からはマレー社が出版元となるが、たとえば同時期に出版されたイザベラ・バード(Isabella Bird, 1831-1904)の『日本奥地紀行』(*Unbeaten Tracts in Japan*, 1880)と比べるなら、バードの作品が非常に刺激的でありつつも、あくまでも旅行記、印象記であることは明らかだろう。実際、1878年(明治11年)に日本に到着したバードはおおよそ2年かけてこの本を執筆するが、その「まえがき」で「本書は『日本についての本』ではなく、日本で行った旅の話であり、日本の現状に関する知識を広げるためのなんらかの足しになろうとする試みである。[……]日光以北のわたしのルートはすでに踏破された道筋からまったく外れており、完全に縦断した西欧人はひとりもいなかった。[……]『西洋人のすでに踏破した道』は日光をのぞき、数行で記すのみにとどめたが、東京(江戸)の場合のように、特徴がこの数年間に著しい変化を受けたところでは、多少概略を述べてある」²⁹と明言しているように、ガイドブックではなく、探検記としてこの本を書いたことを認めている。

これに対してサトウの本は、明らかに日本を訪れる人たちにいかに有益な情報を与えるかを

²⁶ アーネスト・サトウはのべ450日、日本各地を旅行したという。内田宗治、前掲書、p. 15-19。

²⁷ 命名者はイギリス人のお抱え外国人ウイリアム・ガウランドだが、サトウは自著でその名称を用いている。こうした事情に関しては、『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』(庄田元男訳、講談社学術文庫、2017)所収の訳者解説(とくにp. 275-283「日本アルプスの発見」と「日本アルプスの命名者=ガウランド」)に詳しい。なお、地名の新たな命名に関して、井上幸孝による大航海時代にスペイン人がアメリカで行った命名の分析によれば、状況は異なるが、「日本アルプス」は「既存地名に準じた命名」に相当すると考えられる。井上幸孝「西洋の拡張と土地の命名(1)」(『専修大学人文論集』97号、2015)および「西洋の拡張と土地の命名(2)」(『専修大学人文論集』99号、2016)を参照のこと。ちなみに、木曾川を「日本ライン」と呼んだのは、『日本風景論』(1894)を著わした志賀重昂(1863-1927)である。

²⁸ アーネスト・メイスン・サトウ『アーネスト・サトウの明治日本山岳記』、上掲書、p. 268-269。

²⁹ イザベラ・バード『イザベラ・バードの日本紀行』(上)(時岡敬子訳)、講談社学術文庫、2008、p. 4-5。

常に心がけていて³⁰、日本での生活に対する細かな必要事項（初版では「地理」、「気候」から「旅宿」、「道路・乗物」など 15 項目。再版のマレー社版では、これらを「いわゆる英国人を中心とした『日本学』の研究水準に見合った」³¹ ものにするために、大幅に補強している）をガイドに盛り込み、また行先別にルートを設定し（初版では 54 ルート、再版では 64 ルートに増補³²）、それぞれに「里程」によって最初に距離を示し、その後で個別の目的地について、伝説から特色までを事細かに記している。もともとサトウが序文で書いているように、こうした形式はマレー社のガイドブックの体裁を踏襲したものだったが、当時の旅行者の多くが裕福な知識人だったことが、訪問先の文化的な情報を掲載するという編集方針に現れている。そしてサトウやチェンバレンのような優れた日本研究者にとってこの点を充実させることは、非常に重要な意味を持っていたことは疑いがない。

第 3 版から編集はチェンバレンに委ねられるが、旅行者に有益であろうとするサトウの理念はそのまま踏襲され、この『日本旅行案内』は幅広い読者を獲得し続けた。1913 年（大正 2 年）の 9 版（1922 年に増補版）まで版を重ねていることが、その証左だといえる。このようにチェンバレンにせよサトウにせよ、日本を深く理解しようとし、また愛した人々の想いはこの『日本旅行案内』の最も重要な部分を支えていた。

ところで、サトウやチェンバレンが『日本旅行案内』を出した時期には、このジョン・マレー社とドイツのベデカー社 (Karl Baedeker) がヨーロッパでは旅行案内書の双璧とされていた。後に述べるように、ベデカー社からは日本ガイドが刊行されなかったため、英語による外国人向けのしっかりとしたガイドブックはアーネスト・サトウ、チェンバレンらによるものしかなかった状況だったが、チェンバレンが帰国したあとの 1914 年（大正 3 年）に、新たに分厚い日本のガイドブックがアメリカ人によって出版されている。それが『テリーの日本帝国案内 朝鮮、台湾を含む (*Terry's Guide to the Japanese Empire including Korea and Formosa*)』（以下、『日本帝国案内』と略記）という本である。

このガイドブックでは最初に、1. A「どうやって日本に行くのか」、B「旅費および通貨、両替、銀行、税関」から J「店、雑貨もろもろ、養殖真珠、水晶、翡翠」までを示したあと、続けて 2. 「日本語」、3. 「地理的スケッチ」、4. 「国旗、国歌、新聞、芸者、乞食」、5. 「柔術、レスリング、ハラキリ、刺青」、6. 「仏教建築」、7. 「神道建築と鳥居」、8. 「仏閣、城郭、橋、風景、庭」、9. 「仏教」、10. 「仏教の諸流派」、11. 「神道」、12. 「キリスト教、武士道」、13. 「日

³⁰ サトウはイザベラ・バードの著作の情報を有益なものとして高く評価している。

³¹ 庄田元男「訳者解説」、アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』(下) ルート篇Ⅱ、平凡社、1996、p. 440.

³² 1913 年の最後のものとなる第 9 版では、台湾も含め全部で 86 ルートになっている。 *Collected Works of Basil Hall Chamberlain, Major Works 8*, Ganesha Publishing/Edition Synapse, 2000 を参照のこと。

本美術」、14.「陶磁器」、15.「文学」、16.「簡単な歴史」、17.「略年表」、18.「書誌」といった項目の順に、日本に対する基礎知識が説明されている。

さらに本編に入ると、1.「日本中央部（ルート 1～12）」、2.「日本北部（ルート 13～18）」、3.「蝦夷、樺太およびサハリン（ルート 19～23）」、4.「日本西部（ルート 24～38）」、5.「九州および琉球と五島列島（ルート 39～43）」、6.「朝鮮、満州およびシベリア横断鉄道（ルート 44～49）」、7.「台湾と南西諸島（ルート 50～54）」という順番で、目的地別のルートに説明が加えられている。

このように、日本での生活に関する理解のための実践的、文化的な説明、細かくルートに分けた解説などは先行するマレー社やベデカー社のものと同じ体裁を取っているし、本の大きさや雰囲気もベデカー社のガイドブックに非常に似ているが、記述そのものは日本を理解するためのものというよりも、日本を知る情報を供給するものに近くなっているように感じられる。それは「日本はこれほどに早い変化を遂げているのであるから、年ごとに改訂しなければすぐに古びてしまう」³³ という意識を反映したものでもあるだろう。

テリーのガイドの「前書き」では、執筆者は実地に日本を訪問し、実際に体験したことを書いたという点が強調されているが、この記述を裏から読むならば、このガイドブックは旅行者が旅行者の視点で旅行者のために書いたものだったといえるかも知れない。それは日本と深い関わりを持った日本研究者が心血を注いだ先行する本と同じ体裁でありながらも、目指すところは微妙に異なった、文字通りのガイドブックだった。

また 1914 年（大正 3 年）という出版された時代を反映して、対象が日本の本国から大きく広がり、タイトルが示すように朝鮮、満州、台湾などを含んだ「大日本帝国」全体に及んでいる点にも注意しておく必要があるだろう。ちなみに、マレー社版の最終版となる第 9 版の序でチェンバレンは、「日本のアジア大陸における新たな領土については、言語、習慣などが日本本国とは大きく異なっているので、本書で扱う範囲の中には入れていない」³⁴ と述べているが、この新たな『日本帝国案内』と後述する『東亜英文旅行案内』では、満州や朝鮮は独立した項目として立てられている。

サトウの『日本旅行案内』を訳した庄田元男は、訳者解説の最後に「時はすでに大正に入っている（大正二年のこと）。妖精のように麗しき古き日本は、もはや遠くの彼方に去ってしまった。[……] 日本は近代化されたのだ。西欧人にとっての古き良き日本の時代は終焉を迎えた。そして、正統派としての『日本旅行案内』の果たすべき役割も漸く終わった。一八八一年から

³³ T. Philip Terry, *Terry's Guide to the Japanese Empire*, Foreword, 1913, v.

³⁴ B. H. Chamberlain, Preface to the ninth edition, *Collected Works of Basil Hall Chamberlain*, Major Works 8, 前掲書、ページ記載なし。こうした一種の潔さがこの本の魅力でもあり、同時に限界だった。

一九一二年まで、明治から大正にかけて長きにわたり、旅行者に硬派の日本紹介を続けた本書の使命も終了したのである」³⁵と書いている。満州、朝鮮から日本、さらに台湾と南西諸島までの広大な範囲を 800 ページほどの小型本に詰め込んだテリー版『日本帝国案内』は文字通り、新しい日本の情報を新たな観光客に紹介する本として登場した、新たなタイプのガイドブックだったのである。

4. 日本人による外国人のためのガイドブック——『東亜英文旅行案内』～外国人に見せたいものは何か

このように外国人が書いた日本のガイドブックがサトウ、チェンバレンの『日本旅行案内』からテリーの『日本帝国案内』へと世代を交代したのと同じ時期に、外国人に向けて日本人が案内書を出すという試みも行われたことは、注目してよいだろう。それが『東亜英文旅行案内 (An Official Guide to Eastern Asia)』である。発行は 1913 年（大正 2 年）から始まり 1917 年（大正 6 年）に全 5 巻³⁶として完結している。出版元は日本の鉄道院である。内田宗治はこの 5 巻からなる緻密で壮大な本を後藤新平の大風呂敷の結果だと評しているが、この企画は後述するように 1908 年（明治 41 年）、当時満鉄総裁だった後藤新平がロシアを訪問した際に「英語で書かれた東アジアの完全なる旅行案内書」³⁷を日本で作成する約束をしたことから始まったものだった。この本はドイツのベデカー社のガイドブックを模範として、形式もそれまで日本で刊行されていた単なる物見遊山の指南書の域を大きく踏み越えた、本格的なヨーロッパ式の日本旅行案内書だった。

ベデカー社のガイドブックは当時、前述のマレー社のものと人気を二分するもので、ドイツ語版、英語版、フランス語版の三つの言語で刊行されていた点に特色と強みがあった。中川浩一が確認したところによれば、1863 年刊行の「スイス案内」を最初に、1914 年の時点で英語版の「ベデカー旅行案内」は全部で 26 種類あり、その「非対象地域は、サハラ以南のアフリカ、南アメリカ、オセアニアに加えて、朝鮮・日本くらいだったろう」³⁸という。内田宗治は、「マレーの旅行案内書シリーズは一九〇〇年代（明治時代後期）に入るところから『ベデカー』にその座を奪われていく。したがって、明治時代前期、欧米人が日本に関する旅行案内を出版

³⁵ 庄田元男「訳者解説」、前掲書、p. 447-448.

³⁶ 「満州・朝鮮」、「南西部日本」、「北東部日本」「中国」、「東インド・フィリピン、仏領・蘭領インドシナ、タイ、マレー半島」の全 5 巻である。なお、本書は後の鉄道省である鉄道院が作成したものであることから、official に「公認」という訳語を当て、『公認東亜案内』と訳されることもある。

³⁷ 内田宗治、『外国人が見た日本』、中公新書、2018、p. 130.

³⁸ 中川浩一『旅の文化誌—ガイドブックと時刻表と旅行者たち』、伝統と現代社、1979、p. 90.

に対する言及と、その延長上にある「大陸横断」(Trans-Continental)という言葉である。これは、この本が刊行された当時の鉄道事情と密接に関わっていた。つまり、満鉄、東清鉄道、そしてシベリア鉄道を乗り継ぐことで、東アジアとヨーロッパが直接に結ばれたのである。

鉄道を介して、ヨーロッパとアジアが一直線につながるという構想——そうした目で改めて5巻の配列を見ると、第1巻が「満州・朝鮮」に充てられ、その後に「南西部日本」、「北東部日本」「中国」、「東インド-フィリピン、仏領・蘭領インドシナ、タイ、マレー半島」と続く順番は、列車でヨーロッパから日本を目指してくる旅行者が通過する経路を反映していることがわかる。これを前述のテリーの『日本帝国案内』の配列(満州・朝鮮は5番目)と比べれば、違いは一目瞭然だろう。老川慶喜によれば、「一九一三(大正二)年六月には、『東京発、パリ行き』の鉄道切符が日本で発売され、運賃は一等料金で四一七円二五銭であった。一六日程度の日数を要したが、船では約五〇日を要したので、かなりの時間短縮となった」⁴⁴ということである。

こうして移動手段の発達によってヨーロッパから東アジアまでをひとつの視野で見渡すことが可能になったこの時期に、日本人によって英語で書かれた外国人向けの最初のガイドブックが刊行されたことに注目した内田宗治は、これらの内容や記述、選ばれたテーマを比較することで、日本人が外国人に「見せたい」と考えたものと、外国人が日本で「見たい」と思ったものの間の差を浮き彫りにするという、非常に興味深い検証を行っている⁴⁵。

内田宗治によれば、日本が外国人に見せたいと考えたものは主として「近代化」されたものに集中している。たとえば、鉄道院の案内が観るべきものとして紹介しながら、テリーの『日本帝国案内』では取り上げられていないものには、「帝国議会議事堂、帝国劇場、慈恵病院、伝染病研究所、天文台、巢鴨精神病院、上野駅、日本ビール醸造所などの近代的施設が多い。こうした施設は日本が欧米に倣って作ったものであり、欧米人がわざわざ日本で見たいと思うものではない。だが日本人としては、科学や文化が欧米並みに発達していることを示したいので、これらを見てほしかった」⁴⁶と指摘している。

一方、テリー版の『日本帝国案内』では、日本の古い情緒が残ったものにも、当然のことながら関心が向けられている。「本文を読み進めると、同書の著者が、とくに江戸時代以来の光景、風俗を求め、それを発見する喜びを読者に伝えたがっていることが感じられる。当時の日本を西欧化の過渡期と捉え、日本の町を歴史的に俯瞰する視点も垣間見える」⁴⁷と内田宗治は指摘する。この点でテリーの『日本帝国案内』は、時代と程度こそ違いはするが、サトウやチェン

⁴⁴ 上掲書、p. 188.

⁴⁵ 内田宗治、前掲書、第5章を参照のこと。

⁴⁶ 上掲書、p. 143.

⁴⁷ 上掲書、p. 146.

バレンが敷いた日本についての外国人によるガイドブックの精神を正統に引き継いでいるといえるだろう。

これに対して、『東亜英文旅行案内』は「伝統的なものにほとんどふれていない。情緒に訴えるような記述もない。[……] 面白味に欠け報告書のような記述になった一番の理由は、外国人という読者に対しての向き合い方の問題だろう」⁴⁸ という指摘のように、外国人の視点よりも、日本人の考えに立って編集されたガイドブックだった。こうした傾向は、このガイドブックが誰に向けて書かれたのかという点以上に、誰が満足するために書かれたのかということのほうが強く出た結果だと考えられる。

さらに、遊郭「吉原」については、『日本帝国案内』では数ページが割かれているのに対して、『東亜英文旅行案内』では場所すら触れられていないという⁴⁹。これを内田宗治は吉原を日本人が見せたくないものと考えたためだとしている。サトウ、チェンバレンのガイドブックでは簡単な紹介がなされているが、実際のところ、外国人の間では吉原は名前が知られた場所だったという。ちなみに、ポール・クローデルは関東大震災（1923年 大正12年）のルポルタージュの中で暗にこの場所に触れて、「浅草の沼地では二千人の女達がじりじりと焼かれていったのである」⁵⁰ と報告している。こういった点にはさりげなく、けれども明確に、ガイドブックや日本のことについて書かれた本の中の視点と、その対象に関わる姿勢の差異が浮き彫りにされているといえるだろう⁵¹。

最後に、一般的な旅行ガイドではないが、箱根宮ノ下の富士屋ホテルが出した『We Japanese』という本について一言、触れておきたい。これはホテルが自主的に出版したもので（支配人の山口正三が発行人）、日本の文化全般についての非常に浩瀚な事典とも呼ぶべき本である。サトウやチェンバレン、あるいはテリーのガイドブックの冒頭に置かれた日本の生活、風習、文化等の紹介に充てられたページを拡張し、充実させたような趣があるが、規模がはるかに大きくなっている。1934年（昭和9年）12月に第1巻が刊行され、次いで1937年（昭和12年）6月に第2巻、1949年（昭和24年）6月に第3巻が刊行されている。3冊を合すると600ペー

⁴⁸ 上掲書、p. 147-148.

⁴⁹ 上掲書、p. 138-141 を参照のこと。

⁵⁰ ポール・クローデル「炎の街を横切って」、『朝日の中の黒い鳥』、前掲書、p. 50。地震の直後に逃亡を防ぐために大門が閉じられ、これによって逃げ遅れた人たちの多くが近くの弁財天池で非業の死を迎えたのである。

⁵¹ 内田宗治はその上で、日本人が西欧人に見せたいと考えたものと、アジア人に見せようとしたものには差があったことを指摘している。さらに同じアジアでも清国から来た人々と朝鮮の人々に対して見せようとしたもの間にも差があった。日本より明らかに歴史のある中国には近代化した模範としての日本、朝鮮に対しては近代化した日本と同時に、歴史ある国としての日本の姿を示そうとしたと、内田は指摘している。それは「同じ東洋でも国や地域により日本が見せたいものは異なった。[……] この時代も観光には、対米感情やアジアの覇権に絡んで政治、外交の要素が色濃く入り込んでいた」ことの反映である。内田宗治、前掲書、p. 157-161.

ジ近い大部の本で、美しい和綴じで造本されている。

第1巻の序文に書かれているように、記述の主なソースはチェンバレンの『日本事物誌』およびジャパン・ツーリスト・ビューロー⁵²から出ている月刊誌『Tourist』とNYKの『Travel Bulletin』⁵³ということだが、1950年に刊行された版では889の図と共に、日本の風習、習慣、儀礼、祭り、芸術と工芸が、そのほか多数の事物とともに紹介されている。ホテルが独自に出したものであるということで、政治的、経済的な思惑なしに、純粋に日本の事情を紹介したいというホスピタリティと意欲に満ちた冊子として、今日のわたしたちの目にとっても非常に興味深いものとなっている。

5. 外国人による日本人のための提言——治癒から治療、そして保養場としての温泉地へ～温泉の利用法の変化

ヨーロッパやアメリカから日本にやってきた人々が驚きの目で見たもののひとつに、入浴の風習があったことは、いろいろな証言が示している。もともと、入浴に対する見方は、日本と欧米社会では明らかに大きく異なっていた。とりわけ、入浴の風習と温泉については、初期の欧米人は大きな驚きとともにレポートを随所で送っている⁵⁴。

『温泉の日本史』の中で石川理夫は「外国人が見た日本の入浴文化と温泉」という項目を立て、中国から派遣された趙秩などの見聞の例から16世紀のポルトガル人船長ジョルジュ・アルヴァレスのレポートといった江戸以前の記録、そして幕末のオランダ商館関係者の温泉記述、さらに19世紀末のイギリス駐日公使オールコックやフランス公使ロッシュといった外交官の温泉訪問までを概括しているが、とくに開国以来の事情として「外国人を驚かせたのは熱い湯と、銭湯や一部の温泉場でのこの混浴だった。以前は湯具着用だったのが、江戸後期の文化爛熟期に手ぬぐいひとつになっていた。欧米人ほど性的象徴とは意識されず、むしろ母性の象徴であった女性の乳房が混浴風呂で露わになっていただけでも、当時禁欲主義的風潮が主流だった欧米人は目を見張ったのである」⁵⁵としている。実際、混浴は当時、ヨーロッパ人たちを当惑させたもののひとつで、たとえばフランスから来日した青年貴族ド・ボーヴォワールは、箱根

⁵² ジャパン・ツーリスト・ビューローは1912年に鉄道院の主導で開設された組織で、主な目的は日本に来る外国人の誘致宣伝、情報提供および斡旋だった。ジャパン・ツーリスト・ビューローに関しては、内田宗治の『外国人が見た日本』の第4章および老川慶喜の『鉄道と観光の近現代史』第七章を参照のこと。

⁵³ 日本郵船（NYK）が顧客などに向けて発行、配布していた英文の情報誌。

⁵⁴ 今日でもなお、欧米の人々は日本の入浴、温泉に関わる独自性を認めている。たとえば、ミシュランのグリーンガイドにおいても、「公衆浴場の入り方（usage des bains communs）」と「温泉（Onsen）」といった項目で説明が加えられている。あるいは草津についてのページなどにも、温泉についての解説が見られる。Le Guide Vert, “Japon”, Michelin, 2009, p. 34, 39, 100, 209などを参照のこと。

⁵⁵ 石川理夫『温泉の日本史』、中公新書、2018、p. 177。

の宮ノ下での混浴体験を記している。中野明によれば、そのときの情景は以下のようなようだったという。

宮ノ下の温泉に到着したボーヴォワールは、そのとき見た光景を決して忘れないと書く。「夕方に入湯を今しがた終えたばかりの男女の浴客が三百名以上も、アダムとイブの姿そのまま、ゆったりとくつろいでいたのである」[……] ボーヴォワールが幕末に日本にやって来た他の外国人と一線を画するのはここからである。単に日本人の入浴を観察するだけでなく自身も入浴するのである。[……] ボーヴォワールはこの中から自分の入る浴槽を選んで一番ぬるそうな湯につかる。「この透明な湯の小さな世界の中にいたのは六人で、かなりきれいな女性が三人、男性が二人、そしてこのわたし。わたしは、まるで湯沸しの中へとびこんだかのようにであった。一分間で侍徒のように真っ赤になり、ほんとに逃げ出したかった。しかし、わたしの仲間も、男女とも笑いながらおしゃべりを始め、わたしは大したことはわからなかったが、きまり文句で答えるといつもの通り大成功であった」。郷に入っては郷に従えてはいないけれど、西洋人でもボーヴォワールのように抵抗なく混浴に溶け込める人物もいた。なお、『富士屋ホテル八十年史』では、文献に見られるものでこのボーヴォワールの一件が、外国人が箱根で入浴した最も古い例だとしている⁵⁶。

とはいえ、多くの西洋人にとってはこうした状況は日本独特のものであったことも事実で、西歐化を推し進める一方で、混浴の評判が日本を貶めると考えた政府は「改善」に努めた⁵⁷。石川理男は「西洋先進国にならない近代化を進める明治政府にとって、混浴は早急に対応をせまられる問題だった。欧米の目を意識し、政府は内務省・警察主導で明治十二年（一八七九）の東京府湯屋取締規則による『混浴・裸体露出の禁止』を皮切りに、明治三十三年には一般浴場での十二歳以上の男女混浴を禁じた」⁵⁸と指摘している。

その一方で、「公衆浴場は同法第一条で『温湯、潮湯又は温泉その他を使用して、公衆を入浴させる施設をいう』ので、同法の適用を受けない地元住民主体の温泉地の共同湯は例外となる。

⁵⁶ 中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか 日本人の羞恥心』、新潮選書、2010、p. 66-67。

⁵⁷ たとえば、イザベラ・バードは日光の湯元や青森の黒石近くの下中野で温泉とそこにいる人々を観察しているが、自らは入浴していない。『イザベラ・バードの日本紀行』(上)、第12信、第36信、前掲書、p. 167-168。および p. 470。ちなみにバードは下中野では、「中央の二軒では男女がいっしょに入浴しますが、ぐるりには木の台があって座れるようになっており、男は男ばかり、女は女ばかりに分かれています。[……] わたしはほかと同じく浴場にもきちんとした礼儀正しさが浸透しているのに気づきました。[……] ただし政府は全力をあげてふしだらな入浴を防いでいます。改革がこういった辺地まで達するには時間がかかるかもしれませんが、遅かれ早かれやってくるのはまちがいありません。大衆浴場は日本の特色のひとつです」と記している。

⁵⁸ 石川理夫、上掲書、p. 198。

歴史ある温泉地を持つ道県でも条例に微妙な差があり、神奈川県は『十歳以上の男女を混浴させないこと。ただし、知事が利用形態から風紀上支障がないと認める場合は、この限りではない』として、これまでの温泉入浴慣習に配慮している⁵⁹とあるように、それまでの混浴形態を半ば容認する姿勢も見せていることから、混浴禁止が当初は主として欧米人に配慮したものであったことが窺える。

そうした中、日本の入浴に新たな価値と方法を提案したのが、「お雇い外国人」として1876年（明治9年）6月に来日した、ドイツ人医師エルウィン・ベルツだった。来日直後の10月26日の日付を持つ彼の『日記』には、次のような言葉が見つかる。

一体、この国と国民に誠意をよせ、本当に好意をいただいているものは、事実をよく吟味して判断せねばならないのです。健全な批判力の助けをかりないでは、ことにこの場合のように二重に困難な事情のもとで、およそ新しいことがどうして成り立ち得るでしょうか。日本人に対して単に助力するだけでなく、助言もすることこそ、われわれ西洋人教師の本務であると思います。だがそれには、ヨーロッパ文化のあらゆる成果をこの国へもって来て植えつけるのではなく、まず日本文化の所産に属するすべての貴重なものを検討し、これを、あまりに早急に変化した現在と将来の要求に、ことさらゆっくりと、しかも慎重に適応させることが必要です⁶⁰。

こうした姿勢に基づき、「ベルツは古くから日本に伝わるものの価値を見出し、それを積極的に採り上げて宣伝した。その一つに温泉がある。日本の温泉の歴史は古く、江戸時代にも後藤良山がその治療価値を賞揚したが、ベルツは、温泉が日本人の間に長く伝承されてきたのは、そこに必ず医学的効用があるからに違いないという確信を持って調べ始めた。明治十七年（一八八四年）に「持続温浴について」“*Ueber permanente Thermabäder*”と題する論文を『ベルリン臨床医学雑誌』*Berliner Klinische Wochenschrift*, Jg. 21, 1884, Nr. 48（第二十一年）に報告した。これは日本の温泉治療を近代医学の立場で眺めた最初のものといえる。ベルツはたんに温泉医学を推奨するだけでなく、積極的に温泉場の開発にも手を貸した。箱根には公的保養所を作る計画を立て、草津には理想的保養所を作るために土地を購入した⁶¹と、酒井シヅは書いている。

ちなみに、サトウ編による前述の『日本旅行案内』の「温泉」の項目を執筆したのは、この

⁵⁹ 上掲書、p. 199.

⁶⁰ エルウィン・ベルツ『ベルツの日記』（トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳）（上）、岩波文庫、1979、p. 47.

⁶¹ 酒井シヅ「エルウィン・ベルツのこと」、『ベルツの日記』（上）、上掲書、p. 15.

ベルツである。外国人向けに「日本の入浴と温泉」という項目の下、「熱い湯に注意」としながら、「外国人がよく訪れる日本の入浴場所について、その湯の成分、入浴法そして温泉一般について記しておく。日本人は概して他国の人に比較すると入浴を好む。外国では冷水が用いられるのに対し日本人はとて高温の湯、摂氏三十九度一四十四度に達するお湯に入り、これを初体験する欧米人には著しく我慢できない。しかしすぐにこの『お湯』や『風呂』に慣れて、冬に快適さを感じるのみでなく、夏も気分をさわやかにするものとして好むようになる。だがあらかじめ用心しなければならない点がある。外国人は三十九度以上のお湯に五分以上浸かってはいけない。[……] これらの注意は天然の温泉に入るときにも同様に適用される。日本の温泉のうち一部はとて水質が強く、特に上州の草津、箱根の芦ノ湯、日光近傍の湯元の温泉は理学的な注意を聞かずに入る事は避けるべきである。この他の上州の伊香保や沢渡、小田原付近の湯本、木賀、宮ノ下、そして熱海の各温泉は無害である」⁶²と書いている。ベルツの個人的な体験と医者としての知見の双方が投影された、簡素ながらも行き届いた解説だといえる。

ベルツは1880年(明治13年)に『日本鉱泉論』⁶³を著わし、「日本ノ天然鉱泉ヲ有スル其数甚タ多ク独逸奥国ヲ除クノ他外国ノ及バザル所ナリ而シテ其鉱泉タルヤ古来邦人ノ属目スル所ニシテ各種患者ノ之ニ浴治シ来レルハ幾百年ナルヲ知ルベカラズ真ニ是造化ノ賜物ト謂フベシ」として、内務省に対してこうした歴史的資源を活用する必要性を提言している。さらに「ベルツは各地の温泉地を衛生的な観点で改革し、箱根や草津、伊香保などには、西洋医学を取り入れた温泉治療所を建設してはどうか」⁶⁴という提案までしている。

日本でも、たとえば黒田藩の典医ですぐれた儒者でもあった貝原益軒(1630-1714)は、すでに『養生訓』の巻第五の中で「湯浴み」と「温泉」の効用について記していた⁶⁵が、ベルツの建白書は西洋医学の見地からの提言であり、治癒を目的とした湯治から明らかに治療行為を見据えたものとなっている点で、それまでのものとは一線を画したものだといえる。とくにベルツのものは温泉が含む成分についての調査を基にその効能を論じている点で、後の温泉案内に大きな影響を与えたと考えられる。

さらに、ベルツが提案した視点の独自性は、こうした効用を説くだけでなく、それをいかに利用すべきかを、施設などの整備の面から説き起こした点にあるといえるだろう。『日本鉱泉論』の中で、「入浴回数多き、入浴時間の長さなど日本人の入浴偏重ぶりを危惧したベルツは、飲

⁶² アーネスト・サトウ編著『明治日本旅行案内』上巻カルチャー編(庄田元男訳)、平凡社、1996、p. 33-34。

⁶³ ベルツは温泉を「鉱泉」としている。なお、このテキストは全文が国立国会図書館のデジタルアーカイブで閲覧できる。本稿での引用はこのデジタルアーカイブからのものである。<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/831485>

⁶⁴ 富田昭次、前掲書、p. 159。

⁶⁵ 貝原益軒『養生集・和俗童子訓』、岩波文庫、1961、p. 111-115を参照のこと。

泉療法の必要性和、温泉の効用には温泉成分のみならず温泉地の気候、日射や乾燥度、高度など環境条件、温泉医の関与の重要性を指摘し、その観点から理想的な環境条件を備えた温泉地計画の必要性を説いた」⁶⁶のである。続いて彼は伊香保と熱海を主に、計画の条件を検討しているが、そこで必要としているのが、衛生面での整備、宿泊および療養設備、道路等のアクセス面での整備であり、ベルツが本格的な療養施設を目指していることが明確にわかる。

実際、この後にベルツは1887年(明治20年)に「皇国の規範となるべき一大温泉場設立意見書」を宮内庁に出し、自らその開設に向けて動き出す。このときにベルツが選んだのは箱根の大涌谷の西北崖で、「その一大温泉場とは、発汗浴、冷水浴など温度の異なる浴槽のほか、痔疾を治すための鯨噴浴まで設け、ホテルを付帯させて、そのなかには体操室や談話室、囲碁・将棋・撞球などを用意した娯楽室を備えたもの。入浴や運動の方法は、すべて正規の医学教科を経た医師が指示を出し、マッサージも医学的に養成された担当者が施すというドイツ式の本格的なクアハウスホテル」⁶⁷だった。ただ、この壮大な計画は土地の購入までは進むものの、最終的に実現することはなかった。

老川慶喜は観光地理学者の山村順次の整理に沿いながら、「温泉地の発達過程は、一般に①病氣治療を第一の目的とした療養温泉地(湯治場)、②病氣予防・健康保持を目的とするが、レクリエーションの場としての機能をあわせもつ保養温泉地、③観光レクリエーション活動の宿泊基地としての性格を強くもち、療養・保養温泉地に比べ、温泉そのものの意義は二次的なものとなる『観光温泉地』という段階をたどる」⁶⁸としているが、この分類に従うならば、ベルツが提案したのはまさに①療養温泉地から②保養温泉地のレベルへの移行だったといえるだろう。ベルツは箱根の計画が不首尾に終わった後の1904年(明治37年)9月に草津を訪れた際、『日記』にこう記している。

まったく神秘的な草津温泉の効能を、最も適切に表わしているのは、日本の有名な小うた「お医者さまでも草津の湯でも、恋の病はなおりやせぬ」である。普通あれほどの難症の癩病ですら、往々にして全治することがあり、少くともたいていは快方に向うのを常とする。[……]草津には、無比の温泉以外に、日本で最上の山の空気と、まったく理想的な飲料水がある。こんな土地が、もしヨーロッパにあったとしたら、カルルスバードよりもにぎわうことだろう。[……]おまけに西洋人を驚かせるのは、まるでエデンの園のように羞恥心のないことだ！ここ数年来は、男女別の入浴が行われるようになり、今では、男女

⁶⁶ 石川理男、前掲書、p. 196.

⁶⁷ 富田昭次、前掲書、p. 161-162.

⁶⁸ 老川慶喜、前掲書、p. 61-62.

共に素裸で往来を歩くものを、ほとんど見かけないが、昔は、それが当り前のことだった。そこでまず、新しい草津を、今の町の外に作る必要がある。それには、好適の場所がたくさんあるし、湯も、毎日数千の個別浴に十分な程度に得られる。来年帰国するのでなければ、自身で療養所を建てるのだが。この温泉の特異な効力が知れわたれば、あらゆる国の人々がやって来ることは確実だ⁶⁹。

ここには、ベルツが一貫して日本の温泉を利用して作り上げようとした理想の施設がはっきりと描き出されている。

②から③への移行は、これから後、日本人の手によって推し進められることになる。すなわち、明治後半から次々に刊行されていく「温泉案内」の類では、ベルツが提案したような要素を紹介しつつ、温泉の効能とアクセスの利便性に応じた温泉利用が薦められている。その一方で、それらの案内書の中で紹介されている温泉は、「温泉国といわれる日本では、古くから温泉が湯治に使われてきたが、そこでは長期療養が普通だった」⁷⁰ 状況から、ごく短期、場合によっては日帰りで見学を楽しむことのできる行楽地⁷¹へと姿を変えていくのである。

6. 日本人の書いた日本人のための案内書——交通手段の進展と観光地の成立～新しいスタイルの定着

ここまで、外国人が外国人に向けて、あるいは日本人に向けて出したガイドブックや提案、そして日本人が外国人に対して発信した日本の情報を見てきた。最後に、日本人に向けて日本で出版されたガイドブックを検証しておきたい。

もともと、日本では道中記のようなものが数多く出版されていて、アーネスト・サトウはそれらに注目していた⁷²。また、紀行文も数多く読まれていた。さらに、江戸時代から「名所図会」が常に人気を博してきたことは、いろいろな場面で紹介されている。とくに鳥瞰図をベースにした名所図会は根強い人気を誇っていて、1921年（大正10年）に鉄道省が刊行した『鉄道旅行案内』にも吉田初三郎（1884-1955）が描いたものが入っているが、吉田は当時「パノラマ地図」と呼ばれた鳥瞰図の第一人者として名声を博していた。

ただ、そうした読み物や絵による地図から得た知識を自ら移動して実践していく移動が大衆的な規模にまで広がっていくのは、やはり交通手段の発達を待つ必要があったことはいうまで

⁶⁹ ベルツ『ベルツの日記』（トク・ベルツ編 菅沼竜太郎訳）（下）、岩波文庫、1979、p. 178-180。

⁷⁰ 富田昭次、前掲書、p. 142。

⁷¹ 老川慶喜、前掲書、第六章「日帰りの『行楽』」を参照のこと。

⁷² アーネスト・サトウ『明治日本旅行案内』（下）の庄田元男による訳者解説、p. 433を参照のこと。

もない。老川慶喜は柳田國男（1875-1962）の言葉を引きながら、「鉄道の利用者には『汽車が無かったら、どれほど難儀をしてあるいて居たろうと思ふ人』と、『汽車が通じたから出て来たといふ人』の二つのタイプがあるという。そして後者のタイプの方がはるかに多く、鉄道が開通すると人びとは『釣り出されて遊覧の客となった』と述べている。鉄道の開通が、多くの人を旅に誘うことになったのである」⁷³としている。

こうして、1883年（明治16年）には『大日本道中記大全 駅通明鑑 旅行必携』（岡大次郎編、求古堂刊）が出され、1895年（明治28年）には野崎左文の『全国鉄道名所案内』が巖々堂から出版されている。この『全国鉄道名所案内』で冒頭に著者が「明治五年東京横浜の間に始めて汽車運輸の道を開きしより以来目下全国既成の鉄道線路は殆んど二千哩の長さに達し軌道の通過する所実に山城、大和、河内 [……] 石狩、胆振の四十ヶ国に涉り猶ほ本年帝国議会の協賛を経、鉄道庁に於いて布設せんとする第一期鉄道線、並に各私鉄鉄道会社に於て仮免状を下付せられ測量若くは工事中のものを合すれば其の延長殆んど四五千哩に及ばんとす亦熾なりと謂うべし」⁷⁴と書く通り、鉄道の発達は急ピッチで行われ、利用者も増えていったことがわかる。

さらに1909年（明治42年）に『鉄道院線沿道遊覧地案内』（鉄道院）が刊行され、続けて1913年（大正2年）には同様の『鉄道沿線遊覧地案内』⁷⁵が、同じく鉄道院から刊行されている。この『鉄道沿線遊覧地案内』では、目次に沿線各地それぞれの見どころとして「都市名邑」、「神社」、「仏閣」、「名所旧跡」、「公園」、「避暑避寒地（温泉・海水浴場）」、「山嶽」、「瀑布」、「河湖」の推奨すべき場所の紹介がなされているが、これは後の「日本八景」選定などに繋がっていくものだといえるだろう。

また、末尾に付録として貝原益軒の「旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄭客をあらひすゝぐ助となれり、是も亦、我が徳をすゝめ、知をひろむるよすがなるべし」⁷⁶という言葉に続けて、「廻遊旅行の栞」として「この一章には大方の旅行を計画せらるゝ参考にもと、一週日内外にて巡遊し得べき各方面の名勝地を列記せり」⁷⁷として、「三浦半島廻り」から「伊勢参宮」など、各地の見所を巡るルートが紹介され、本のタイトルにふさわしい締めくくりとなっている。

関戸明子によれば、温泉旅行の大衆化は「鉄道院によって『鉄道院線沿道遊覧地案内』が出

⁷³ 老川慶喜、前掲書、p. 13-14.

⁷⁴ 『全国鉄道名所案内 上編・下編』 シリーズ 明治・大正の旅行7 監修・解説 荒山正彦、ゆまに書房、2014、p. 41-42.

⁷⁵ この『鉄道沿線遊覧地案内』では、すでに附録として朝鮮、南満州、台湾の項目が加えられている。

⁷⁶ 『鉄道沿線遊覧地案内』、1913、ページ記載なし

⁷⁷ 上掲書、付録 p(1)・p(8).

版される以前にも、さまざまな『漫遊案内』や『旅行案内』の存在を確認できる。こうした出版物が目立つようになるのは明治三〇年代である。五井信は、この時代の特徴を、ガイドブックを持って出かけ、各地でさまざまなことを学ぶ読者／旅人の姿にみることができるという（「書を持って、旅に出よう」）⁷⁸ という下地があり、明治末から大正期に鉄道網が整備されることによって一気に進展することになる。ちなみに、関戸明子が参照している五井信の論考の副題は文字通り、「明治 30 年代の旅と<ガイドブック><紀行文>」である。

上高地を《再発見》したことで知られるイギリス人宣教師ウォルター・ウェストン (Walter Weston, 1861-1940) が『日本アルプス』(*Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps*, 1896) の中で、「もう一度本国へ帰って、『日本に鉄道がありますか』という質問を耳にすると、奇妙な気持がする。なぜなら、こうした質問に十度も返答をした後、つい先日、駐英日本総領事の林権助氏が親切にも、日本の汽車汽船の旅行について興味深く書いた一冊の案内書を寄贈してくれたからである。その案内書には、一八九五年の終りに、二十九の会社に分担されて、延長三六一九キロにもおよぶ鉄道が開通していると述べてあった」⁷⁹ と書いているように、1890 年代後半から日本の鉄道網は急速に整備されていった。

また、移動の簡便化に伴う逗留のスタイルの変化も、見落とすことはできないだろう。この点については、内湯と外湯をめぐる権利の問題と、一日ないし数日だけの逗留を認めるかどうかという問題が関係していた。関戸明子は「療養・保養温泉地が観光地化する直接の契機について、山村順次は、交通機関の整備によって短期滞在観光客が多数来湯することにあると指摘する。それにともない、宿泊形態が自炊・半自炊から賄付へ、滞在の短期化、客層が固定客から不特定多数の客へ、入湯圏の広域化、宿泊料金の上昇などが生じ、温泉の利用も外湯（共同浴場）から内湯（旅館内の浴場）へと移行していく（『新観光地理学』一九九五年）」⁸⁰ としている。

1917 年（大正 6 年）に誠文堂から出された『日本温泉案内』はまたたくまに版を重ねてベストセラーとなった本だが、その「はしがき」では、刊行の目的は次のように記されている。

『命あつて 物種といふから、一つ温泉へでも……。』と言った調子で飛び出すにして、サテ愈々となると、『何所にしようか。』と来る。何所にしようか、之が実際大問題だ。何しろ日本全国には、一千以上の温泉場があるのだから、逆も素人眼には差別が附かない。ト言つて何所でも宜いとは猶更行かないから、何うしても之を解決すべき師友的良書が必要だ。が、従来其様な良書があつたであらうか。曰く無かつた！。之れが本書刊行の理由

⁷⁸ 関戸明子『近代ツーリズムと温泉』、ナカニシヤ出版、2007、p. 79.

⁷⁹ ウォルター・ウェストン『日本アルプス』（岡村精一郎訳）、平凡社ライブラリー、1995、p.33-34.

⁸⁰ 関戸明子、前掲書、p. 107.

で、此の必要に応ずる為に、本社は多大の努力を以つて所謂温泉なるもの、具体的調査を遂行したのであつて、此の一本を繙くと同時に、殆ど身を実境に処するの思あらしめ、且何人の説明なしにも、充分に其の性質特効利害を知了することは出来るのである⁸¹。

こうした編集者の緒言は、文字通り「滞在の短期化、客層が固定客から不特定多数の客へ、入湯圏の広域化」を裏付けるものとして読むことができる。

あるいは、1920年（大正9年）に鉄道院から出された『温泉案内』の「例言」では、「本書は鉄道によって、沿線附近の温泉に遊ぼうとする人の為に、其の旅行計画の参考に供しようと思つて発行したものである」⁸²とした上で、「嘗て雑誌『実業之日本』に掲載された石津葉学博士の温泉療養に関する談話は、一般浴泉者にとつて有益な参考となるべきものと信じ、巻末に転載した」⁸³とあるように、行き先の温泉を選択する際の基準に、湯の入り方や成分と効能などを重視している。

ちなみに、この本は出版元が鉄道院であることから、温泉の分類は路線ごとになっていて、「東海道線」、「中央線」、「関西線」、「北陸線」、「山陽線、讃岐線」、「山陰線」、九州各線（鹿児島線、宮崎線、川内線、豊洲線、長崎線）、「総武線」、「信越線」、「磐越船」、「奥羽線」、「陸羽線」、「北海道各線」の順に、350ほどの温泉地が紹介されている。それぞれの温泉について位置、温度、湯の質、効能、さらに簡単な見どころの紹介などが手際よく紹介され、場所によっては宿、その地まつわる伝説も添えられているが、「例言」に「鉄道から余りに離れた温泉、旅館設備の無い温泉、一般湯治者に関係の薄い温泉場などは、書き洩らしたのも多い」⁸⁴とあるように、この本もやはり、人々の温泉利用の形態の変化に則した出版物であることが分かる。また、鉄道院の本らしく、巻末には「主要温泉交通時間賃金表」が添えられていて、それによれば、たとえば東京を起点とした場合に「箱根・湯河原・熱海・伊東」は国府津で下車するが、距離は「四八、二哩」、所用時間は特急で「一、三〇時間」、普通で「二、〇〇時間」、運賃が「一等 三、六九円 二等 二、四六円 三等 一、二三円」⁸⁵である。

⁸¹ 宇野富夫『保養遊覧 日本温泉案内』、博文堂、1917年、ページ記載なし

⁸² 鉄道院『温泉案内』、博文館、1920年、ページ記載なし

⁸³ 上掲書、ページ記載なし

⁸⁴ 上掲書、ページ記載なし

⁸⁵ 上掲書、p. 455。なお、鉄道院は1922年（大正12年）に英語による温泉案内を刊行している。この本では1. 序論、2. 日本の地理、3. 火山、4. 鉱泉、5. 鉱泉の効用、6. 種別、7. 放射能泉、8. 入浴法の区分、9. 日本の宿、10. 主要都市近辺の温泉リゾートの順に紹介したあと、具体的に北日本の温泉（箱根、伊豆、信越線、中央線、北陸線、東北線、陸羽線、奥羽線の各沿線、北海道）、南日本の温泉（関西、山陽線、山陰線の各沿線、四国、九州）、朝鮮の温泉、南満州の温泉、台湾の温泉について、地図や写真を添えながら案内したあと、他国のベルギーやフランス、ドイツからアフリカ、インド、ニュージーランドなどの温泉についてもページを割いている。Cf. *The Hot Spring of Japan (and the principal cold spring) including Chosen (Korea) Taiwan (Formosa) South Manchuria, Japanese Government Railways, 1922.*

昭和になると観光はさらに重要な要因として、脚光を浴びるようになる。とくに汽車・汽船という交通手段に加え、自動車の普及が人々の移動を支え始めたことは、旅行の可能性をさらに押し広げることになった。自動車の普及に関していえば、1908年（明治41年）のフォードT型発売⁸⁶が大きな契機となり、1922年（大正11年）にはシトロエン5CVが登場するなど、急速に人々の生活の中に自動車が入ってきている⁸⁷。日本の自動車登録数は1923年（大正12年）に15,731台、1924年（大正13年）は24,333台、1925年（大正14年）29,164台、そして1926年（大正15年、昭和元年）が40,070台、1927年（昭和2年）には51,762と、毎年、急激な増加⁸⁸をし、公共の交通手段としては、1912年（明治45年、大正元年）に最初のタクシー会社（フォードT型6台）が登場し、1924年（大正13年）には大阪にいわゆる円タクが登場している⁸⁹。

ちなみに、今日、ミシュラン・ガイドの発行元として名高いフランスのタイヤメーカーのミシュラン社が自動車の普及のために旅行ガイドをドライバーに配り始めたのは、1900年のことである。こうした流れに沿って、ベデカー社のガイドブックも鉄道利用者から次第に自動車を使う旅行者向けにスタイルを変えていったと、中川浩一は指摘している⁹⁰。また、上述の駐日フランス大使ポール・クローデルも本国からルノーなどを輸入し、自らその宣伝に努めている。1926年（大正15年）に彼が別府を再度訪問した際には、油屋熊八はこの温泉地に2台あった車で詩人大使を近隣の景勝地に案内して廻り、大変に感激されたという。

この時代に行われた日本人に向けた観光地の売り込みのひとつの結実は、1927年（昭和2年）の「日本八景」制定だろう。これは中国の瀟湘八景に倣い、日本の代表的な景観と観光地を選ぶもので、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が共同で、鉄道省の後援の下に行われた。すでにある日本三景や富士山、さらに人の手で作られたもの（錦帯橋など）を外し、瀑布、溪谷、海岸、河川、温泉、山岳、湖沼、平原の8部門において、投票数と選考委員の見解とを合せる形で選定が行われた。その結果、瀑布：華厳の滝／溪谷：上高地／海岸：室戸岬／河川：木曾川／温泉：別府／山岳：温泉（雲仙）岳／湖沼：十和田湖／平原：狩勝峠がそれぞれ選ばれた。人々の関心は高く、日本の当時の総人口の1.5倍にあたる9,348万票余が投票されたとされるが、このことはとりもなおさず、この時代の観光に対する日本人の関心の高さを物語っている。と同時に、瀑布や山岳など他の7部門が自然の景観であるのに対して、温泉だけがニュアンス

⁸⁶ フォードT型に関しては、折口透『自動車の世紀』、岩波新書、1997、p. 60-67を参照のこと。

⁸⁷ シトロエン5CVに関しては、上掲書のp. 107-110を参照のこと。

⁸⁸ 尾崎正久『日本自動車史』、自由研究社、1942、p. 7を参照のこと。

⁸⁹ タクシーに関しては、佐々木烈『日本のタクシー自動車史』三樹書房、2017に詳しい。また円タクの普及については、齋藤俊彦『くるまたちの社会史』、中公新書、p. 156-159を参照のこと。

⁹⁰ 中川浩一、前掲書、p. 120-136。

が異なることから、この時代にすでに温泉が治癒、治療とは別の目的を担うものとして人々から認知されていたことがうかがえるだろう。

主催した新聞社はその後、8人の文人にそれぞれの景勝地に関わる紀行文を依頼し、それを一冊にまとめて出版⁹¹しているが（華厳の滝：幸田露伴／上高地：吉田絃二郎／狩勝峠：河東碧梧桐／室戸岬：田山花袋／木曾川：北原白秋／別府：高浜虚子／温泉（雲仙）岳：菊池幽芳／十和田湖：泉鏡花）、この中には当時の観光の形態の変化を因らずも反映したのものが見つかる。たとえば別府を訪れた高浜虚子（1874-1959）は、地獄廻りに出発して海岸通りを北に自動車で行った際に道路の広さと新しさに気づき、それが1920年（大正10年）に作られた八間幅の道路だと教えられて、「この前、日名子氏に案内されて地獄廻りをした時は、人力車でなければ通れなかった。所によると徒歩でなければ通れなかった。それも、朝出掛けて遂に鉄輪温泉に一泊して、二日ばかりであったことを思うと、夕方の五時頃から涼みがてらに自動車に乗って出掛けるなんか、随分変化したものと思った」⁹²と書いているが、これなどはそのまま別府が便利な観光地となったことを喧伝する効果も持っていたと考えられる。

あるいは、室戸岬を担当した田山花袋（1872-1930）は、その冒頭で「宇多の松原に行って私達ははじめて自動車を下りた。それにしても何という滑らかな愉快的疾走であったろう。それはとても関東などでは想像だも出来ないような立派なドライブ・ロードである。[……]海に出たと思うと、そこに明媚な松原があつたり[……]、出来てまだいくらかも経たないような旅舎や料理屋がそこそこに沢山に点綴された。さっきの汽車はそこまで来て、ここを一時的終端駅としている。つまりここがこうして開けたのもその交通によるものだということがそれとうなづかれる。[……]手結の浜。手結の山。それを越えて行った時の感じは、長い後までも忘れられないであろう。[……]昔は道がもっと上の方にあつたので、そこから今の新道に移したのだそうだけれども、兎に角あの江藤新平が阿波境の甲浦でつかまって、それから野根山を越して高知に護送される時に休んだという焼餅屋、その婆アさんがいまだに生きていて、その時の話をするとこのもなつかしかつた。[……]しかし自動車はそうした時代おくれの光景には目もくれないというようにしてただまっしぐらに走った」⁹³という文章で、鉄道、さらに自動車による観光化とその発達を的確に書き記している。

ちなみに、『蒲団』（1907）などの作品で知られる田山花袋は日本文学史では一般的に「自然主義作家」というカテゴリーに入れられるが、博文館に入社して1903年（明治36年）から『大日本地誌』の編集に携わった経歴を持っていた。また彼は大変な健脚で、日本各地の温泉

⁹¹ 経緯に関しては、幸田露伴ほか『日本八景 八大家執筆』、平凡社ライブラリー、2005を参照のこと

⁹² 高浜虚子「別府」、『日本八景』、上掲書、p. 166.

⁹³ 田山花袋「室戸岬」、『日本八景』、上掲書、p. 82-85.

を自分の足で廻った一種の紀行文集である『温泉めぐり』（1918年）は当時のベストセラーになっているが、この点でも「日本八景」の執筆者にふさわしい作家だったといえるだろう。

7. ふたたび、クローデルと日本～1898年から1921年へ——むすびに代えて

クローデルの最初の日本周遊（1898年）と大使としての日本滞在（1921年から1927年）の間にはおよそ20年の落差があったが、この時間は日本人とその社会にとって、きわめて変化の大きな時期だったといえるだろう。この間に日本は日露戦争に勝利し、韓国を併合し、中国に進出し、第一次世界大戦にも戦勝国として名を連ねることになった。大正末に横浜港に降り立った詩人大使の目には、新たな日本はどのように映ただろうか？ 本稿の冒頭で引用した「そこにあるユニークさを見分けることができるのは外国人だけなのです」と語った講演の最後に、クローデルはこう訴えかけている。

人間と自然との間にこれほど密接な理解が存在し、これほど明瞭にお互いがお互いの刻印を宿し合っている国はありません。二世紀の間、日本人と自然はただ互いに見つめあうことだけしかしなかったのです。この和合がいつまでも続き、それが他の国の人々に対してもつ教訓が絶えることのないように、という私の祈りを表明することをお許してください。そして、それを背負い込むこの国とはもともと何の関係もない、異質で陳腐な建物が侵入してきて、ちょうど奴隷や地獄に落ちた者の吠える声のように、この魔法の島々の音楽を攪乱することがありませんように⁹⁴。

クローデルが日本に求めたものは、当時の日本人にとってはどういったものだったのだろうか？ それはむしろ破棄したいものだったのだろうか？ あるいはクローデルが日本に見たものは、日本人が見てほしくないものだったのだろうか？ それでは、日本人はクローデルに何を見て欲しかったのか？

こうした問いに答えるひとつのヒントとなる指標が、詩人大使が日本で発表した舞踊劇『女と影』（*La Femme et son ombre*, 1923）をめぐる批評である。これは坪内逍遙の『新楽劇論』（1904）に影響を受けて日本の革新的な舞踊家たちが試みた新舞踊のための作品で、五世中村福助（1900-1933）が率いる「羽衣会」の依頼を受けて、世界的詩人と評判の高かった詩人大使クローデルが書き下ろした作品だった。その成立経緯や位置づけについては中條忍の論考⁹⁵や

⁹⁴ ポール・クローデル、前掲書、p. 40.

⁹⁵ 中條忍「クローデルと日本——『女とその影』に落ちた日本の影」、『文学』57号、岩波書店、1989およ

拙論⁹⁶に詳しいが、この舞踊劇（mimo-drame）は1923年3月に帝国劇場で初演された。

作品は極めて単純な構造で、いにしへのどこともわからない場所に武士（松本幸四郎）が従者を連れて登場する。そこに死んだ彼の前妻の亡霊と思われる存在（中村芝鶴）が姿を見せる。遅れて武士の現在の妻（中村福助）が現われ、夫が見たものは幻だと取り合わない。再び前妻が姿を見せると、武士は刀で切りつける。ところが、声を上げて倒れたのは現在の妻の方で、後には前妻の笑い声だけが響いている。

今日目から見れば、紗幕を使用した幻想的な舞台空間や、音楽を担当した五世杵屋佐吉の果敢な試み（邦楽器によるオーケストラ演奏）など、1920年代の文化交流の情勢を反映したものだと言評することもできるが、当時は「さて、蓋をあけてみてからの『女と影』の評判だが、これは正直に言って毀誉褒貶相半ばしたと言ったら当たっているだろう」⁹⁷ というものだった。それは「高名な詩人大使が、来日後、初めて書き下ろした舞台作品とあってか、『女とその影』の入りはよかった。[……]しかし、当時の劇評を見ると、かならずしも好意的ではなく、むしろ酷評に近いものが多い。日本かぶれした外国人の書いた、ちゃちな和風舞踊劇というのが、評者のおよそ共通した意見であった」⁹⁸ ということだが、実際、酷評を代表するものとして正宗白鳥が評したものを見てみると、「クロオデル君は、武士と三味線を取り入れたら何でも詩になると思っているものであろうか」⁹⁹ という、かなり手厳しいものだった。

また評論家の町田博三は、「社会的にも芸術的にも醜態を極めたのはクローデル氏の『影と女』（ママ）とか言う舞踊である。クローデル氏は世界的文豪か知れないが所詮は一個の観光客に過ぎない、武士の妻が乗り物で来て、真夜中往来で三味線を弾かせることの不自然さがお気がつかれぬ程度に日本の事情に暗い方である」¹⁰⁰ と、これも厳しい口調の劇評を書いている。ここに投影されているのは、西欧人に日本がどのように見られているのかという面に向けられた日本人の意識であり、文字通り、「見せたい日本」——欧米にひけをとらない近代国家日本——をクローデルが観ていないことへの苛立ちに他ならない。この意味で、サトウやチェンバレンのガイドブックからテリーのもの、さらに『東亜英文案内』といった本の背後で形を変えつつ常に深く刻み込まれていた「見せたい日本」と「見たい日本」の間の溝は、クローデルが日本に到着した1920年代にもまだ、脈々と繋がっていたのだといえるだろう。批判をする人たちは「外国人の目」を、日本を示すためのバロメーターとして使用しようとしているが、そのメー

び『ポール・クローデルの日本』、法政大学出版局、2018。

⁹⁶ 根岸徹郎「ポール・クローデルの『女と影』と日本」、『演劇のジャポニスム』、森話社、2017。

⁹⁷ 山内義雄『『女と影』前後——記録風に』『日仏文化』23号、1968年、p. 19。

⁹⁸ 中條忍「クローデルと日本——『女とその影』に落ちた日本の影」、『文学』57号、岩波書店、1989、p. 99。

⁹⁹ 正宗白鳥『『女と影』を評す』（下）、『時事新報』、1923年3月4日

¹⁰⁰ 町田博三「羽衣会を観ての感想」、『新演芸』5月号、1923。

ターにメモリを付けたのが実は自分たち自身であることを、正宗白鳥たちは忘れてしまっているようにも見える。

1876年（明治9年）に来日したばかりのベルツは、『日記』に「ところが——なんと不思議なことには——現代の日本人は自分自身の過去については、もう何も知りたくはないのです。それどころか、教養ある人たちはそれを恥じてさえいます。『いや、何もかもすっかり野蛮なものでした〔言葉そのまま！〕とわたしに言明したものがあろうかと思うと、またあるものは、わたしが日本の歴史について質問したとき、きっぱりと『われわれには歴史はありません、われわれの歴史は今からやっと始まるのです』と断言しました」¹⁰¹と書き記している。こうした状況と心情は、クローデルの『女と影』に対する日本人の反応が図らずも浮き彫りにしてくれたように、物質的に近代化された大正時代まで実は綿々と続いていっただけか、逆に本稿で言及した『東亜英文旅行案内』の一種偏った記述が示していたように、人々の心の中では近代化に反比例するように、むしろ根底では強くなってきていたといえるのかもしれない。

逆に、日本政府が忌み嫌い禁止しようとした明治初期の混浴やあからさまな裸体に対して、寛大な意識を持った西欧人もいた。そのひとりが、パリのギメ美術館の基礎を作ったことで知られるフランスの実業家で、東洋美術の蒐集家だったエミール・ギメ（Émile Guimet, 1836-1918）である。中野明は「ギメも日本人の習慣を容認する。そして、強い口調で次のように言う。『私ははっきりと言う。羞恥心は一つの悪習である、と。日本人はそれを持っていなかった。私たちはそれを彼らに与えるのだ』。ギメの予言も見事的中する」¹⁰²と指摘しているが、このギメの言葉は、二つの文化が接触した際に生じる軋轢において、少なくとも価値の優劣はないという判断の重要性を、わたしたちに教えてくれている。ここからは、この稀代のコレクターの東洋の文化に対する根本的な姿勢が透けて見えてくるようにも感じられる。

その一方で、ベルツが先鞭をつけて示した西洋医学的な温泉療法や保養の考えを、日本人は見事に自分たちのスタイルで昇華し、自らの生活の中で取り込んでいる。明治末から大正にかけての数々の旅行、温泉案内書の氾濫は、交通手段の発展と相俟って、そうした人々の受容のひとつの表れとして捉えることができるだろう。それは「外国人の目」を借りることで自国のことを深く知り、改めて別の角度から享受することができた喜びと人々の逞しさの表現といえるかも知れない。ある意味で、外国人が《発見》したものを日本人が《再発見》することによっていっそうの発展を遂げたものの代表が、行楽旅行と温泉保養地なのである。こうした流れの明確な表れのひとつが、本稿でも取り上げた「日本八景」の制定であろう。

人が自分の住む場所を離れ、移動することが前提である旅行、そしてそのために作られたガ

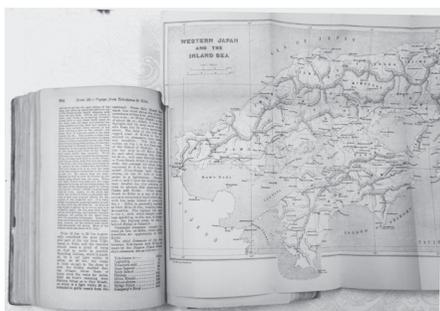
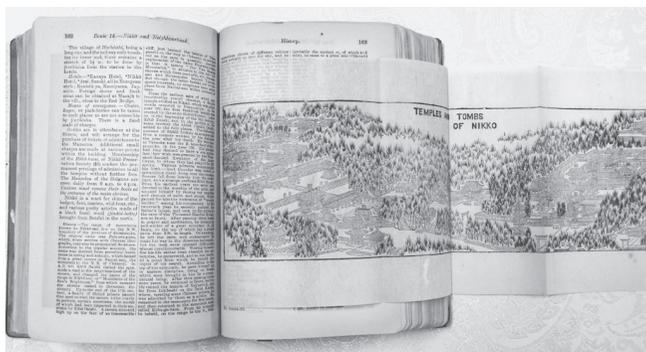
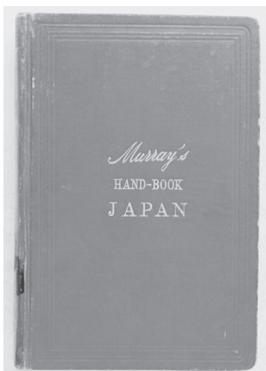
¹⁰¹ エルウィン・ベルツ、『ベルツの日記』（上）、前掲書、p. 47.

¹⁰² 中野明、前掲書、p. 124.

イドブックは、まさに人間が触れあう際の《発見》と深くかかわるものである。そして文化と文化、人と人の交流、さらには対等な交流ではなく、場合によってはあくまでも一過性の触れあいを基盤にした上での、お互いにとっての「見て欲しいもの」と「見たいもの」、さらに「見て欲しくないもの」の複雑な交差を反映する、貴重な資料の役目を果たしているといえるだろう。

1.

クローデルが1898年（明治31年）の最初の日本訪問の際に参照した、バジル・ホール・チェンバレンのマレー社『日本旅行案内』第4版。初版（1881年 明治14年）と第2版（1884年 明治17年）を編集したのはアーネスト・サトウ。1891年（明治24年）の第3版からチェンバレンとメーソンが編著を担当している。折り込み地図や時刻表などの情報が詳細に載っていて、当時、日本を訪れる外国人にとっては必携の書だった。写真は日光と瀬戸内を中心とした西日本を紹介したページ。



2.

ベデカー社のガイドブック。赤い表紙で小型版ポケットサイズが特徴。詳細な地図と図版の多さが売り物だった。写真は1920年代のもので、それぞれ英語版(左)とドイツ語版(右)。サトウ、チェンバレンたちによるマレー社のガイドブックよりも一回り小さい。写真はドレスデンを紹介したドイツ語版の地図と案内のページ。



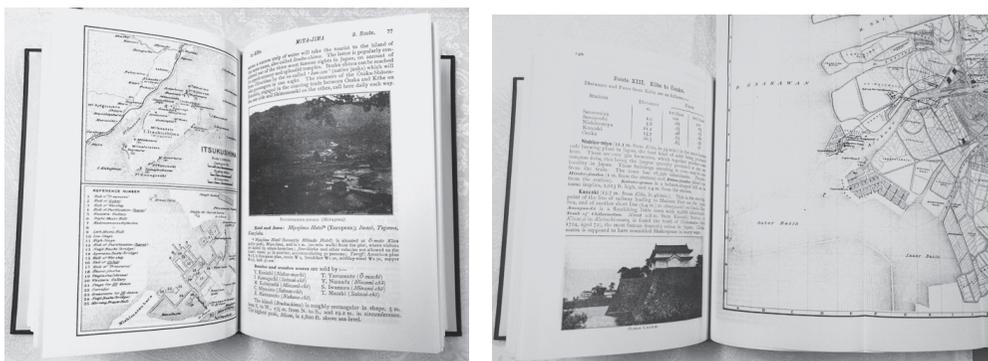
3.

『テリーの日本帝国内 朝鮮、台湾を含む』 写真は1930年(昭和5年)の増補版。初版は1914年(大正3年)に刊行。小型のポケットサイズで、地図や図版などを多用している点でも、また色と形もベデカー社のガイドブックに非常に似ている。大きさはベデカー社のものと同様である。



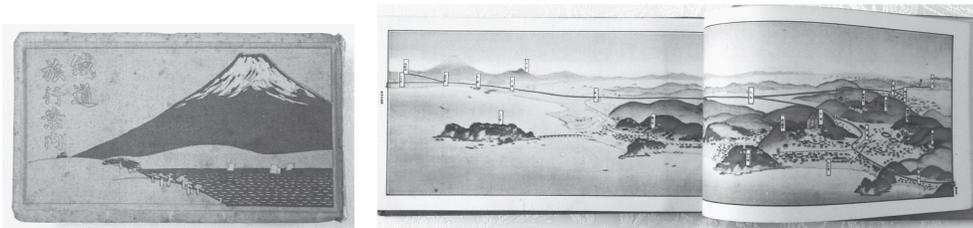
4.

『東亜英文旅行案内』。1913年（大正2年）から1917年（大正6年）に刊行。写真は復刻版のもの。日本の鉄道院が出した、英語による本格的なガイドブック。図版などはベデカー社のものよりも優れていると高く評価された。写真（右）は大阪を紹介した箇所。



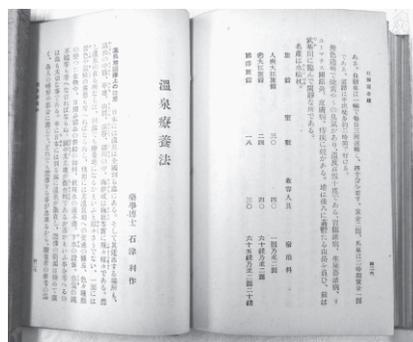
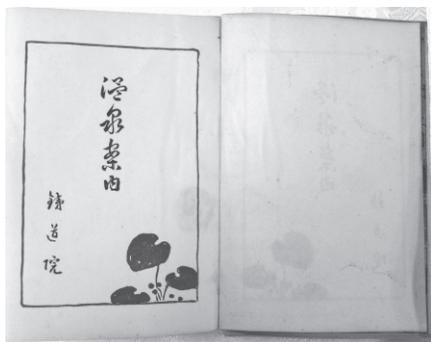
5.

1921年（大正10年）に鉄道院から刊行された『鉄道旅行案内』。横長の判型の本で、大正の広重と呼ばれた吉田初三郎のパノラマ図が多数配されていて、旅情を誘う。写真は湘南方面の図。左に江の島、その奥に富士山が見える。右は鎌倉方面で、山の間に大仏が座っている。遠景は横浜、東京方面である。



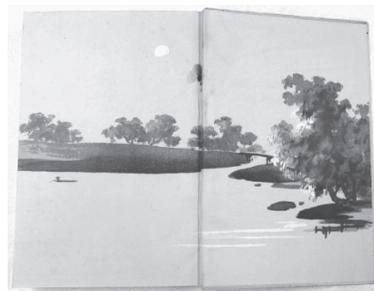
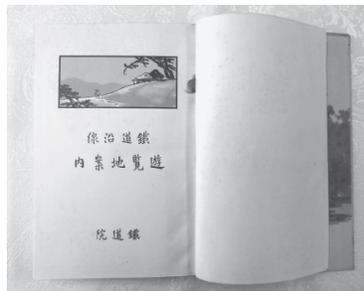
6.

1920年（大正9年）に鉄道院から刊行された『温泉案内』。小型のポケットサイズで、持ち運びが容易な大きさになっている。巻末には「温泉療養法」が添えられている。



7.

1913年（大正2年）に鉄道院から刊行された『鉄道沿線遊覧地案内』。山と清流を描いた表紙、湖沼の風景を描いた内扉などが、人々を景勝地へと誘う。



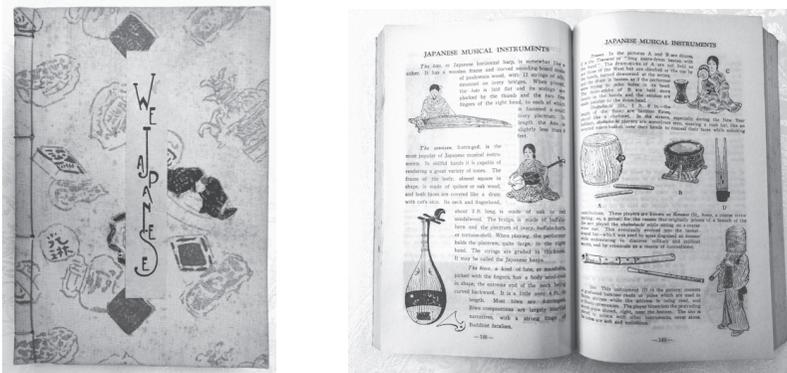
8.

『保養遊覧 日本温泉案内』の1917年（大正6年の初版）と1918年（大正7年版）。初版刊行後、またたくまに版を重ねた当時のベストセラー。写真の右側は初版。表紙には湯に浸かる鹿が描かれ、傷を癒すイメージが伝わる。左側の1918年版では、表紙は湖の景勝地になっていて、むしろ遊覧・観光気分を引き出すものになっている。巻末には「入浴者の心得」が添えられている



9.

富士屋ホテルから出された『We Japanese』。写真は1950年版。チェンバレンの『日本事物誌』をお手本のひとつにしたという日本のさまざまなものに対する記述は、きわめて精緻かつ多岐に亘っている。写真は日本の楽器についての説明のページ。美しい和綴じの本。



10.

1927年（昭和2年）の「日本八景」選考結果を知らせる案内。選定された8カ所の風景の写真が添えられている。これは「別府温泉」と「室戸岬」のもの。室戸岬では右下の道路に自動車が入っているのがわかる。



研究会・シンポジウム報告

2019年3月18日(月) 定例研究会報告

テーマ： 中国・新常態を振り返り

報告者： 原田博夫：専修大学経済学部

その他： 丸山 徹：慶應義塾大学名誉教授

小原雅博：東京大学教授

スリチャイ・ワンゲーオ：タイ・チュラロンコン大学教授(ビデオメッセージ)

林 玄弼鎮：韓国学中央研究院・院長(ビデオメッセージ)

時間： 15～17時

場所： 2号館ラーニングスタジオ 211

参加者数：42名

報告内容概略：

経済成長が高速から中速に移るなか、その軟着陸を図るべく中国では2014年に習近平によって新常態なる政策目標が立てられた。この点に着目して、社会科学研究所では2016年度に特別研究助成「中国の新常態はどこに向かうのか」(3年間計画)が発足し、中国現地調査を実施し、南京審計大学等との研究交流を中国、日本双方で重ね、この研究計画は2018年度をもって終了する。この研究グループの参加者はすでにその成果を研究論文として綴っており、当定例研究会ではこのグループの2018年度責任者であり、この年度をもって定年退職する原田博夫によって研究総括を専修大学ソーシャル・ウェルビーイング(SWB)研究センター等での研究蓄積を踏まえながらおこなった。

新常態を掲げながらも、中国では都市化の進展、PM2.5問題、水質汚濁、地域間格差、貧困問題等解決すべき課題が山積しており、生活の質の向上をこの計画の中でどのように実現し、その場合生活の質をどのように測り、その向上のゴールをどのように定めるのか、こうした論点を明らかにすることが必要となる。その前提として、新たなマクロ指数が模索されなければならない。経済審議会開発委員会による「国民純福祉(Net National Welfare)」、国連開発計画の「人間開発指数(Human Development Index)」、ニュー・エコノミクス財団の「地球幸福度指数(The Happy Planet Index)」、OECDの「より良い生活指数(Better Life Index)」等すでに提示されている。GDP成長率だけでは幸福度を測ることはできない。叙上の新たな指標を参考に、専修大学SWB研究センターで独自の調査をアジア地域で行い、各国・地域での幸福度と不平等は、逆相関していることが明らかとなった。この調査結果を踏まえて、中国での幸福度の如何も含めて、新常態政策の動向を見定めていかなければならないことが示唆された。

記：専修大学経済学部・宮寄晃臣

執筆者紹介

鈴木 健郎 本学商学部准教授
川上 隆志 本学文学部教授
根岸 徹郎 本学法学部教授

〈編集後記〉

「月報」671号をお届けする。今号は、鈴木健郎氏「日本の山岳信仰と温泉」、川上隆志氏「草津の温泉文化—湯治・ハンセン病・被差別部落」、根岸徹郎氏「日本の《発見》——西欧人／日本人による《旅行》と明治・大正期のガイドブック～ポール・クローデルの目に映った1898年と1920年代の間の日本を例として」の3論文の掲載となった。

歴史、地域、また外国から見た日本という3者それぞれの視点から、温泉地が持つ種々の機能の中でも湯治場として、すなわち「治癒」の場としての意味が対象化されていて興味深いものとなっている。

T.K

2019年5月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製 作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
